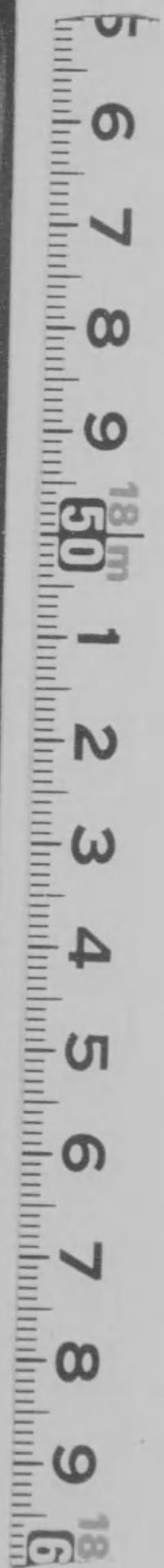


396  
227



始





26. 7. 9



2/2354  
く

396-227

救ひなき祈り

アンドレ・マロ  
伊藤欽二 譯

日本評論社版

大正  
10 11. 3  
内交



## 序 文

### — アンドレエフの印象 —

彼は千八百七十一年中央露西亞なるオリオールオリオールの町に於て、始めて此世の光を見た。彼は其處で中學の課業を受けたが、學問が何より嫌ひで、席順は常に後の方だつた。

彼に取つて、斯うした中學時代の最も懐しい、最も美はしい追憶は、たゞ學課と學課との間の休息時間と、そして時々教場から放逐された時のことのみだつた。

森閑とした長い廊下を、一人して單調な高い足音を響かせながら、行つたり來たりして、その靜寂さに浸つてゐることが、何とも言ひやうの



ない異様な感じを、彼に與へるのであつた。

廊下の左右は戸が堅く鎖してあつて、その戸の向側には、生徒が一杯に充ちてゐるのである。太陽の自由な光線が、とある間隙から漏れて来て、休息時間に煽り立てられて、未だ沈み切らない塵埃に反映して、キラ／＼戯れてゐる光景が、何か斯う神秘的な意味を潜めてゐるかのやうに思はれてならなかつた。

彼の父は側量師だつたが、彼が中學の課程を未だ卒へないうちに亡くなつてしまつた。彼は大學に這入つてから、學資の不足のために酷く困難した。ペテルブルグ大學に在つた時などは、食に飢ゑながら、二三日も過したことがよくあつた。然しそれは、學資を得る道が全然に無かつたと言ふよりは、むしろ彼が寸毫も社會的に慣れてゐなかつたと言ふこ

とに起因したのであつた。

彼は大學の課程をモスクワで卒やした。

モスクワでは友人や或る団体からの補助があつたので、物質的には左程困難を感じなかつた。

千八百九十四年に彼はピストル自殺を畫て、失敗した。それがために彼は、管轄廳から懺悔させられたのであつた。それがために

それから彼は心臟病に罹つた。別に危険を感じるほどの病氣ではなかつたが、執念く倦怠を感じる病氣だつた。

その頃彼は二三の創作を試みたが、皆失敗に了つた。たゞ幼少時代から、少なからぬ興味と熱心を持つてゐた繪の方は、どうやら芽葉が附いて来て、一枚の肖像畫に對して、二三ルーブルの報酬が與へられた。



千八百九十七年に彼は學位證を受けて、陪審補に叙せられた。その頃は漸々創刊されたクリエールと言ふ新聞紙に、裁判の報告を書くことを依頼されてゐたが、時間の都合上裁判の材料を得ることが出来なかつた。

千八百九十八年にクリエール新聞の記者ノールウィック氏のすゝめによつて、彼は處女作を發表した。此處に於て始めて彼は、作家としての天分を社會に認めらるゝに至つたのである。

彼の思想的發展は、明らかに三期に區劃されるやうであるが、始めの頃の彼は、幾分哀愁を含んだ厭世的情緒の豊かな、現實主義的な作家であつた。斯うした態度は、千八百九十八年即ち彼が文壇に認めらるゝに至つた當時から、千八百二年の前半期まで續いた。

此の期に於ては、専ら現實生活の事象を、描出することに努力してゐた。

論ずるまでもなく、如何なる作家の如何なる作品を覗いて見ても、その人の個性乃至は思想を窺ひ得るやうに、彼の作品に於てもその個性を窺知することは、敢て困難なことではなかつたけれども、彼の個性や思想の影は、むしろ背後に潜められてあつたので、現實生活の事象は、それがために少しも煩はされることなく、浮彫のやうに明瞭に表現されてゐた。

然しながら、何人も彼の此の當時の作品の裡に於ても、後年現はれたやうな思想の特徴が隠蔽されてゐたと言ふことを、閑却することは出来ないであらう。



その思想とは即ち、生に對する恐怖、理性の虛妄及び暗黒の恐威等であつて、それは二期に於ける彼の問題小説の中に、明らかに見るこゝが出来るのである。

一期に於て現實的事象の表現に努力した彼は、二期に於ては、彼の凡らゆる創作力を傾けて、思想問題に突進したために、彼の藝術的天才は漸次と社會的思想の奴隸となるに至つたのであつた。

斯くして彼は、その思想を體現せんがために、凡らゆる問題の關門を叩いた。

此處に於て彼の問題小説が始まるのであるが、此のワシリー・フィウエースキーの一生を描いた「救ひなき祈り」——（原表題は「ワシリー・フィウエースキーの一生」と言ふのであるが、上記の表題は、譯者が僭越

をも省みず、その内容に依つて附けたのである。）等は當しく此の時代に於ける作品なのである。

斯様にして彼が、純粹な藝術的題目を放れて、漸次社會問題に没入するにつれて、彼の思想には明らかなる限界が示現されて來た。それは、廣汎なる人生問題や社會問題を解決する能力の不足と言ふ悲劇に陥らざるを得なかつたと言ふことである。

彼は彼の人生觀に於て、「人間の事業は凡て空虚である」とか「裸かにて生れたるものは、裸かにて地に歸るべし」とか言ふ極めて原始的な評價の外、何等新しい發見をなし得なかつたのである。

ともあれ彼の想へに依れば、人間は元來幸福を享受すべく作られたものである。人間には偉大な思想、高尚な道德的本能や純潔な青春の美



さが恵まれてゐるに拘らず、人生の前途には、超え得ざる壁郭が、超え得ざる隙罅が、嚴然として据ゑてゐるのである。人間はこれを超えやうとして、皆その前に打ち倒れてゐるのだ。人間は、此の隙罅を超ゆるにはあまりに無力である。

此處に人生の悲劇があるのだ。

人間の道徳的情操は暗黒に依つて覆はれ、理性は無智と狂妄とに依つて惑亂され、遂に人間生活は、死に依つて破壊されて了ふのだ。

斯うした彼の人生觀は、三期に至つて殆んどその絶頂に達するのであるが、一方翻つて當時の露西亞の社會狀態を観るに、慘虐なる政治の壓迫の下に呻吟してゐた露西亞民衆は、漸次ミ人間的自覺の下に、勇ましく自由の赤旗を翻すこと度々であつたが、遂にその志を得ず、彼等をし

て殆んど絶望に近い狀態に投げ込んで了つたので、一種の厭世的思想が彼の國の智識階級インテリゲンチヤを支配するに至つたのである。

彼アンドレーフが、斯かる社會環境の下に在つて、厭世的觀念に陥つてゐたと言ふことは、決して偶然的事實ではないのである。

『凡らゆる生活を拒否することに依つて、人は自分自身の辯護人となり得るものである。自分は厭世主義の父なるシヨペンハウエルを讀んだ當時と同じく、今に至るも猶人生に何等信する處がない。』

悲痛な言葉が彼の口から叫ばれてゐる。

勿論斯うした厭世的觀念が、哲學上遂に倒壊せねばならぬ運命にあることを論ずるのは、決して困難なことではないが、兎に角、彼の多くの作品に依つて窺知さるゝ處の思想の悲劇、道徳の悲劇及び生の悲劇は、



實は凡らゆる人類の悲劇を意味するものではなくして、作者彼自身の悲劇だつたと言ひ得るのである。此の意味に於て吾等は、却つて多大の同情と涙とを以て、彼の作品に接することが出来るのである。

彼は常に現實生活の内裡に於て、深酷なる人生の苦痛に深く觸れて行つた天才である。彼は此の陰慘な苦痛より脱却せんがために、凡らゆる努力を惜しまなかつた。

彼の眼に映する凡てのものは、生命の無い石のやうな都會と、陰鬱な荒屋あはらやとであつた。人々は籠の中の鳥のやうにしてその裡に生活し、そして利己主義の衣を以つてその身を包んでゐる。自然はたゞ臆病な人間の社會より響く呪咀の絶叫を反響するのみで、人生の苦痛には何等の同情をも寄せない。

彼は斯うした人生の苦惱を見るに忍びなかつた。斯くて表現された彼の作品の凡てには、何れも暗黒と恐怖とが充溢してゐるのである。彼に取つて一切の存在は、謎であり空虚である。人間の存在は無意義なる犠牲の存在である。人々は前途に横たはつてゐる超え得ざる壁郭の故に、美や善の世界を見ることが出来ないのである。

彼は斯うした憐れな人類の生死の秘密を把握してゐる運命の不可思議に對しても、また自分自身の暗黒なる衝動に對しても、常に自己の實力と貧弱さとを意識し、恐怖して止まなかつたのである。

不可抗的運命は、不吉な前兆を以て、絶えず人間生活を怯やかしてゐる。そして遂には超え得ざる壁郭を以て、人類を永劫の世界より離隔し、彼等を底知れぬ深淵に投げ込んで了ふのである。



それは、死の恐怖よりも更に一層恐怖に充ちた人生の謎と、人智の及び難い秘密とそして不可測の未來とを以て、吾々を戦慄せしめる。彼の厭世主義は、更に宗教に於てすら、救はるゝ道なしとして、彼を愁息せしめてゐるのである。

此の一篇は當しくその代表的な作品と見てよからうと思ふ。

彼に於ては、假令宗教を信じやうと否とに拘らず、此の運命と言ふ神秘的な力に對しては、凡てが孤獨なのである。

人間の「斯くありたき」熾烈な欲求も、必然的運命の欺瞞に依つて、遂に「斯くあらねばならぬ」絶望に沈淪させられるのである。

此の宗教的悲劇が、此の一篇に於て、凡らゆる虚無と暗黒と恐怖と絶望との凄慘な事實と共に描かれてゐる。

『私は人生の眞を目指してゐる。私は存在の意義を求めてゐる。私を圍繞する一切の事象の眞を求めてゐる。』

と叫んだ彼は、人生そのものを否定して出發したゝめに、遂に不可解と謎誤との脱れ得ざる深淵に陥つて、人生問題の解決と、救ひの恵みとを把握し得ない悲境に沈んだのである。私は此の眞摯と敬虔との充溢した一篇の作品を譯了した時、實に感慨無量だつた。今に至るも猶言ひ様のない悲痛な感じに襲はれてゐる。私は謹んで此の一篇を、大多數の人々に讀まるゝことを衷心より祈つて止まない。

東京の郊外にて

一九二一、八、九

譯者識す



# 救ひなき祈り

ア  
ン  
ド  
レ  
ー  
フ  
作  
  
伊  
藤  
欽  
二  
譯

(一)

ワツシリー・ファイウエースキーの一生は、苦悶の謎のやうな運命の連続であつた。それは丁度不思議な呪詛に罹つてゐるものやうに、青年時代より、常に悲哀と病苦と煩悶との重荷に、訶嘖さいごまれてゐたのであつた。そして彼の心臓の鮮血の迸りほし出る創痕は、決して癒ゆる時がなかつ



た。

彼の社會的存在は、恰かも群星中の淋しい一つの惑星のやうに、眞實に孤獨であつた。そして物を糜爛させ、微を生せしむるやうな異様な空氣が、見えざる陰影となつて、常に彼の身邊に付き纏つてゐるかのやうに思はれた。

彼の父は、邊鄙な小さい町に牧師をしてゐた、敬虔な忍耐強い人であつた。彼自身も亦敬虔で忍耐強かつた。そして度々襲ひ來る災厄が、彼の不快な惑亂した頭腦を仰壓け、暗黒な運命の魔が執念く附け覗つて來るのを、しばし氣附かずに居た位だつた。

彼はたい譯もなく躓づいた。然しまた靜かに起き上つた。彼は再び躓づいた。そしてまた再び靜かに起き上つた。

斯くして彼は徐ろに、彼の脆い蟻の塔を、人生の大路の上に、新らた

に建設した。

彼は牧師になつてから、愛する女と結婚した。そして彼等の面には一人の息子と一人の娘とが恵まれてあつた。

凡てが他の者と同様に平穩だつた。彼は永劫に斯くあるべしと希つた。そして自分の信ずる神を、嚴肅に莊重に、牧師として、將た信仰心篤き市民として讚美した。

斯ふした彼の幸福な生活の七年目の、七月のある暑い午後、唐突に次の様な事件が起つたのであつた。

村の童等は水泳に行つた。パーテル・ワツシリーの息子も其の中に交つてゐた。彼もワツシリーと呼ばれてゐた。毛髪が黒く、温和な性質の子供であつた。その小さいワツシリーが溺死したのだつた。

若い牧師の妻は、大勢の人々とともに河に駆けつけて、人間の死の單



純な、だが怖しい儼を、永劫に彼の女の胸懐に深く銘じたのであつた。その時彼の女の心臓の遅鈍い鼓動は、恰も臨終の時のその如く波打つてゐた。

珍らしく透澄な空氣の中に、多くの人間の影像が髣髴と動めてゐる。見知りの人々であるが、今はたゞ地上を放れた夢幻のやうに淡い。人々の口から吐き出される一言一句が、空中に圓い輪を作り、後から涌き出る言葉と衝突して静かに爆發する。

彼の女には明るい太陽の輝く日が、一生涯一つの憂愁の原因となつてきた。

輝かしい日光の漂うてゐる中に、肩幅の廣い背や、踏みにじられた雑草の中に、確りと立つてゐる裸足を見たり、或は明るい透明な水が揺らめいてゐるその底に、軽い小さい身體が、彼方此方に轉げ廻り、それが

恐ろしいほど近寄るかと思ふと、忽ち恐ろしいほど彼方に遠去つて、遂にその姿が見えなくなつてしまふやうな幻影が、始終彼の女の瞳に映つるのであつた。

小さいワスヤが葬られ、その墓の上にはもう青草が澤山生えても、猶彼の女は、世間の不幸に沈倫した母親のするやうなお祈りを、神に捧げてゐた。

「神様！ 私の生命をとつて、代りにわが子を私に返して下さい！」

間もなくバーテル・ワツシリー家の人々は、燃ゆる様な耀やかなしい太陽が、蠱惑的な河面を照す夏の燥やいだ日に、恐怖を感じるやうになつた。斯うした日に、人々や獣や野は皆笑ひ興するのだが、バーテル・ワツシリー一家の人々は、物憂はし氣に牧師の妻を見守つた。そして、努めて聲高に語つたり笑つたりした、



けれども妻は、懶うげに重々しく身を起し、皆の瞳を凝乎と見つめてゐるので、誰もその異様な視線を避けねばならなかつた。

斯うして妻は、何物かを探し求めながら、皿や匙や壺等を順々に見廻して、やがて引きずるやうに部屋を通つて行く。必要な器具は、皆整然と揃へて置くに拘らず、彼の女は未だ探し求めてゐる。

悦ばしい太陽が高く昇れば昇るほど、彼の女は益々執拗に、不安な容姿で探し求めた。そして遂々夫の傍へ行つて、冷たい手を彼の肩に載せながら、何か読み取らうとするかのやうに、

「ワスヤ！ ねえワスヤ！」

と言ふのだつた。

「何だね、お前？」

バーテル・ワツシリーは、しとやかに、だか失望したらしい聲で答へた。

そして彼は、長い爪の中に土が一杯に詰つた赤く日に焼けた慄へる指で、彼のほつれた髪を撫で上げてやつた。

彼の女には、まだ若々しい美はしさがあつた。夫の古めかしい法衣の上にもたれかゝつた手は、大理石の様に白くそしてなよやかであつた。

「何うしたつて言ふの、お前、お茶が欲しいのかね？、お前はまだ飲まなかつたんだね」

「ワスヤ！ 貴方、ワスヤは？」

彼の女は再び探ねるやうな調子で言つた。そして夫の肩にかけた手を、持て餘したやうに下して、また断えず 何とも言ひ様のない堪へ難い不安さに襲はれながら何物かを探し求める。

まだ掃除の済まない部屋をぐる／＼隅から隅まで歩き廻つて、部屋から庭へ出で、庭から廣場へ行き、そしてまた家へ這入る。



太陽が高く昇つて、樹の間から静かな河の輝きが見える間、彼の女は斯うしてゐた。

娘のなすトヤは、母の上着をしつかと握つて、暗黒な死の影が、六歳の彼の女の靈魂の上に襲ひかつゝつて來たかのやうに莊重に、そして言ひ知れの憂愁の心に抱かれながら、一步々彼の女の母の後に従つて行つた。

娘は自分の短かい歩調を、母の長い歩調に合せやうと努めて居た。

常に見慣れてはゐるが、猶深い秘密を隠藏して、人の心を惑亂さすやうな花園を、苛立たしげに眉を寄せて凝乎と見入つた。彼の女は一方の手で、荒々しげに酸っぱい虎皮草を一本引き抜いた。その時彼の女は、鋭い棘で引搔かれた。その鋭い棘と、酸っぱいギリ／＼鳴る虎皮草のため、彼の女は益々ヒステリックになつて、捨てられた野犬の如く吠えつ

きたいやうな氣分になつた。

太陽が高く昇ると、牧師の妻は自分の部屋の窓を閉め切つて、その暗い處で葡萄酒を飲んでゐた。洋杯を傾ける一杯毎に、死んだ息子を憶ふ情が激しくなつて行つた。そして身も世もあらぬほどの悲歎に沈むのが常であつた。

彼の女は泣いた。そして、恰かも難解の書を読む未熟の朗讀者のやうに、悶へ／＼曳きするやうな調子で、嘗て生き、笑ひそして死んでいつたあのしとやかな、黒い髪の手持った息子のことを、繰り返し／＼語つてゐた。何處か本を読むやうな、歌ふやうな話しの裡から、息子の面影や笑ひや惻愴な言葉などが、あり／＼と現出れて來るのだつた。

「ワスヤ！ 私はあの子にさう言つたわ、さうだワスヤ！ なせお前そんなに猫を虐めるの？ 其麼ことをしては不可ませんよ。ねえ、愛の神



様は、馬でも猫でもそして雞でも、皆んなよくしてやれとお仰つたよ」  
すると可愛い子供が、ばつちりした瞳を瞬かせながら言ふ。

「でもなせ猫は小鳥によくしてやらないの？ 鳩が澤山の雛を孵化してゐると、猫が母鳥を喰つちやつたんだよ。そしたら雛は可哀想に始終母鳥を探し廻つてゐるの」

牧師は絶望しながら、ぢつとして此の話しを聞いてゐた。

戶外では娘のナストヤが、鎖された部屋の前で、毛毬草や龍芽草や鳩毒蕨等の生えてる地上に坐つて、苛立たしげに人形を弄りながら遊んでゐる。人形は寸毫も言ふことを聞かない。彼の女は懲らしめのために、人形の手や足を捻ぢ挫いて、鳩毒蕨で折檻した。

牧師が始めて、妻が酔うて反抗的な挑發的な顔に、苦々しい喜悅の色を浮べてゐるのを見て、斯うした調子が續くのだな、とさう想つた時、

彼はぞつとした。そして彼は無意味な苦笑を凝乎と忍んで、それから乾いた熱い手を擦つた、

けれども彼は笑ひ出した。そして暫く自分の手を擦つた。彼はその不自然な笑ひを制へようとした。然し彼は妻に背を向けて、子供のやうに口に手を當て、またクス／＼と窃み笑ひをした。

やがて彼は俄かに眞面目になつて、堅く顎を噛みしめた。然し彼には妻を慰さむべき言葉がなかつた。妻は極度の昂奮に、身を投げ出すやうにしてあちこち悶え廻つてゐた。けれども彼は彼の女を慰むべき親しい言葉を知らないのだ、妻が眠り込む。彼は三度彼の女の頭に十字を切つて庭へ出。彼は其處で娘のナストヤを探し出し、彼の女の頭を冷やかに撫でて、やがて野邊へと逍遙つた。

彼は、裸麥の高い穂の間の、狭い畔道を進んで行つた。不圖彼は、柔か



な白い塵埃の上に、靴の跡が深く刻み込まれてゐるのを見附けた。そしてまた、未だ新らしい裸足の丸味ある型が彼方此方に残つてゐるのも見た。

道端の麥の莖は、折れ曲つて踏みにじられてゐた。そして穂は泥にまみれて多くは空になつてゐた。

道の曲り角へ來た時、彼は靜かに立ち留つた。なよやかな麥の莖の上には、重い穂が上を向いたり、下を向いたり、或は又外へ向いたりして、四方に伸びてゐた。

彼の頭上には、限り無く澄んだ、燃ゆる様な七月の空があつた。その外には一本の樹木も、一の建物も無く、一の人影すら見られない。たゞ彼のみが、無限に高い燃ゆるやうな蒼空に對して、生え茂つてゐる麥畑の中に、棄てられた者のやうに一人しよんぼりと立つてゐるのみだつた。

パーテル・ワツシリーは雙眸を蒼空に向けた。瞳は小さく、沈んで黒く澄んでゐた。そして日光が彼の瞳にピカリと輝いた時、彼は胸に手を當て、何事かを言はうとした。彼は肩先をびく／＼震はした。鐵の様に堅く閉じた唇は、寸毫も動かなかつた。牧師は齒をギリ／＼鳴らした。そして強ひて口を開いた。口が震へて痙攣的な欠伸が出た時、明瞭な而も高聲の言葉が響いた。

『私は信ずる！』

此の熱狂的な、挑戰的なお祈りの叫びは、何等の反響も無く、果てし無い空間とそして茂り渡つた穂並との間に消え失せて行つた。彼は凡らゆるものを反駁し、また熱烈な證を立てるかのやうに、また戒しむるかのやうに、再び繰り返した。

『私は信ずる！』



斯くて家路を急いだ。彼は再び静かに、彼の毀れた蟻の塔を新らしく建設しはじめた。牛の乳を搾つて、不機嫌になつてゐるナストアの、長い亂れがちな髪を梳つてやつた。そして彼は時刻の可成りに遅いものにも拘らず、七八哩もある村の醫者の處へ、妻の病氣の事に就て相談するために出かけて行つた。

醫者は、水薬の這入つてゐる小壘を彼に與へた。

(二)

パーテル・ワツシリーは村の人々にも、また同僚の者にも、誰にも愛されてゐなかつた。彼の勤行は拙劣で莊嚴さが無かつた。聲は冷やかで、おまけに訥辯であつた。時折り、副牧師すら後を續け得ないほど噪氣込

んで話すかと思うと、忽ちわけの解らないやうな鈍い調子になるのだつた。

彼は敢て吝嗇家と言ふわけではないが、金事や布施等に就しは、兎や角反對的な態度を取るので、不幸にも吝嗇家の謗りをまぬかれなかつた。人々は彼の背に唾を吐きかけるほどの素振をすら見せた。そしてまた彼の暗い生涯を知つてゐる近隣の人々は、彼に逢つたり話したりすることゝを以て、何か不吉な前兆でもあるかの様に、故意に途を外すやうにしてゐた。

十一月二十六日は彼の誕生日である。その日には何時も、澤山の客を招待するのが常であつた。人々は、彼の鄭重な案内状に返事を送つた。けれども来る者は、何時も同僚の僧侶仲間のみで、名望ある村の教會員は、一人も出席するものが無かつた。



彼は同僚に對しても可成りに恥かしく思つたが、殊に彼の妻は、態々町から取り寄せた御馳走や酒が、無駄になつてしまふことに、心を痛めてゐた。

「誰も宅へは來たがらないのだわ」

酔つぱらつた客が、高價な酒や御馳走を何とも思はずに、やたらに腹の中へ詰の込んで、無遠慮に騒ぎ立てながら、やがて散り／＼に別れ去つた後で、酔ひもせずゐた彼の妻は、悲しげな調子で斯う言つた。

教會の長老であるイワン・ボルフィリツチは、彼を遇することが、他の人々よりも一層無作法であつた。彼は不幸な牧師に對して、まのあたり侮辱を加へるのであつた。

牧師の妻が、ひどい飲酒家であると言ふことが、村中に知れ渡つてから、長老は牧師の手を接吻することすら拒絶した。

親切な副牧師が、いろ／＼と辯解したが、長老は聞き入れなかつた。「恥をお知りなさい。貴方は人の前に頭を下げるものではありません。役柄にお時儀をするものです」と斯う言ふのであつた。

イワン・ボルフィリツチは、役柄と人とは決して區別して考ふべきものではない、と言ふことを頑くなに主張した。

「彼れは取り柄の無い人間です。自分の身の仕事が出来ないのみか、自分の妻を説服することすら出来ないのです。僧侶ともあらう者の妻が、飲酒家とは一體何うしたことせう。恥も外聞も知らないと言ふものです。若し私の妻が酒を一滴でも口にしようものなら、私は彼奴を飲んでしまつてやるんだが！」

然し副牧師はそれを拒否するかのやうに頭を振つて、ヨブの哀れな物語りをした。



神が何のやうにヨブを愛し、また何のやうに彼をサタンの試練に逢はせなすつたか、そしてまた神が、何のやうに彼の苦悶に對して酬いを與へなかつたかを話した。

けれどもイワンは横柄な笑ひを鬚の中に浮べながら、氣に入らぬ話を勝手に横取りして、

「其麼ことを長つたらしく話すに及びません。解り切つたことです。ヨブは正しい聖人であつた。然し彼は、何だと言ふのです？ 彼の正義は何處にあるんでせう？ 貴方は、何か外のことを想へたが好いでせう。神は悪人を懲しめます。この諺は敢て嘘言でもない様です」と言つた。

「まあお待ちなさい！ 私には未だ貴方に言はなくちやならないことがあります。若しこれでも貴方が牧師の手を接吻しなければ、牧師は貴方を教會から追ひ出してしまふでせう」

「そりや却つて見物だ」

「さうです。見物に違ひありません」

そこで二人は、牧師がはたして彼を追ひ出すや否やに就て賭けをした。然し長老は賭に勝を占めた。そして彼は無作法にも、牧師に背を向けてしまつた。

牧師の差し出した赤い日に焼けた手は、遣り場無く、宙に上げたまゝ、なつてゐた。

ワツシリーは見る／＼中に眞赤になつた。

此の出來事の噂は、直ちに村中に廣がつた。イワン・ポルフイリツチは、牧師が劣らない人間で、到底もその役柄には適當しないと云ふ考へを一層強めたばかりか、彼は村の農民を煽動して、他の牧師と交替させるために、教務廳に訴へ出る様にすら仕向けたのであつた。



イワン・ポルフィリッチは富裕で、皆の者から尊敬されてゐる幸福者であつた、

彼は他人から崇拜されるだけの容貌を所有してゐた。その頑丈な、高く飛び出た頬骨、そして黒い濃い髯、それは特に彼に威嚴を添へてゐた。

彼は全體に黒い毛が多く、殊に足と胸とが濃いのだが、彼はこれも自分にのみ特別に與へられた天恵であるかのやうに思つてゐた。

彼はまた堅く神を信じてゐた。そして自分は、民衆より選ばれた第一人者であると思ひ込んで、傲慢な上に自信が強く、而も常に快活であつた。

彼はある悲惨な汽車の椿事があつた時、多數の人々が生命を失つたに拘らず、たゞ古ぼけた破れ帽子を一つ失つたのみで、生命は救はれてあつた。

「あの帽子は古いんだ」

此處へ、らず口をすらいいた。

彼は此の出來事に依つて、益々自分に恵まれた神の恩寵を信するやうになつたのであつた。

彼は、人間は皆な悪人でなければ愚人だ、と言ふ思想を持つてゐた。そして何人にも同情を寄せると言ふことをしなかつた。

彼はチガンカと言ふ黒い牝犬を飼つて置いた。處が犬は毎年餘るほど澤山の子を生むので、その中の一番強さうなやつを一匹養ふことにして、他は皆自分で絞め殺すのであつた。彼は欲しがらる者がありさへすれば、誰にでも喜こんでその一匹を與へてやつた。彼は、犬は有益な動物だと思つてゐた。

彼はまた極く皮相的な思想の所有主だが、物事を判断することは速かつた。そして、屢々その判断は、われ知らず變るのであつた。然し彼の



舉動には可成りな確さがあつた。そしてその決断力で以て、一度着手したことは、きつと遣り遂げるのが常であつた。

斯うした事實で、彼は一個の恐るべき非凡人として牧師の眼に映るのであつた。

若しも二人が路上で出逢ふ様なことがあると、牧師は先づ慌しく廣縁の帽子を脱いで挨拶した。行き過ぎると彼は、自分の歩調が小さくなり、重くなり、遂に深い恐怖と恥辱とを感じてゐる者の歩調のやうになつて、彼の屈強な脚が長い法衣に絡みつつかのやうに思はれた。それは丁度彼の苦悶の謎のやうな運命が、あの濃く黒い鬚と、毛深い手と、そして確りした歩調との中に化身してゐるかの様にも思はれ、また、若しも彼がすつかり縮み切つてしまふか、道を避けるか、或は彼の陰に潜み隠れてしまふかしなければ、恐らくあの威嚇的などつしりした肉塊が、彼を蟻の

如くに踏みにじつてしまふやうにも思はれるのであつた。

イワン・ボルフィリツチに關して見聞きすることの凡ては、ひどく彼の注意を惹き起こした。そして彼は一日中、長老やその妻や子供や財産のことの外は、何も考へずに過したことも度々であつた。

パーテル・ワツシリーは、一見農夫のやうな無恰好な汚ない靴を穿き、麻のシャツを着て、村の農夫に立ち交つて働いてゐる時、屢々村の方を振り向いて見るのだつた。

最初彼の瞳に映つるのは教會で、次ぎは長老の二階建ての、赤々と塗つた鐵の屋根であつた。そして彼は最後に、風に吹かれながら、緑色の牧場の中に建つてゐる自分の家の、色褪めた屋根を探し求めた。

此の二つの屋根の不自然な対象は、彼に悲しみと失望とを與へるのであつた。



嘗つて教會の開基祭の折り、牧師の妻が眼を赤く泣き腫らして教會から歸つて來た。そして彼の女は、イワン・ポルフイリツチに侮辱されたと言ふことを牧師に告げた。

それは、彼の女が席に就くと、イワン長老は自分の席から大聲を上げて、

「この酒飲み婆を教會へ入れることは出來ません。教會の恥辱だ、汚れだ！」

と言つたのであつた。

牧師の妻は話したり泣いたりした。

パーテル・ワツシリーは、何のやうに最良眼に見ても、ワスヤの死後四年此の方、妻が老けて衰れたのが、恐ろしいほど目につくのであつた。年齢はまだ若いに拘らず、もう白髪が見える。白かつた齒も黒味がかかり、

眼蓋も脹らんでゐる。

彼の女は、今度は煙草を喫み出した。

女らしい無器用さでもつて、二本の指の間に巻煙草を挿んだ手つきを見ることは、牧師にはほんとに堪へられないことであつた。

彼の女は煙草を喫んではまた泣き出した。巻煙草は、泣き張れた唇に慄へてゐた。

「神様！ なせ？ 神様！」

彼の女は深い憂愁に沈んで、秋の淋しい小雨が降りそぼつてゐる窓を、ぼんやりと見詰めながら、斯う繰り返してゐた。

窓硝子は兩滴に曇つてゐた。そして庭の樺の木はひどく濡れて、幽靈のやうな陰影が、四方に揺らめいてゐた。

薪木を節約するために、ストーブを未だ焚かないので、部屋の空氣は



じめ、冷たく濕つて、戸外と同じく氣持が悪かつた。

「ナスチエンカ、お前はあの人達を何うしようと言ふんだね？」——

牧師は瘦せ衰へた様な熱い手を擦すりながら、姿勢を改らためて言つた。「凡てを忍ばなくてはならない」——

「神様、神様！ あゝ私を助けて呉れる者は、一人もありません」

牧師の妻はかう訴へるのであつた。

その時、隅の方にゐたナストヤの狼のやうな眼が、亂れそゝけた髪の中から異様に輝いてゐた。

夜闇が襲うて來ると、妻は必つと酒を呻るのであつた。そしてパーテル・ワツシリーに取つては、たい驚愕と堪へ難い羞耻とを感せずには居られない様な、呪はれた恐ろしい悲しい出來事が起つた。

周圍の戸を鎖した不健康な暗闇の中で、強いアルコールは、やが上に

も誇張した空想を作り出し、長子を失つた愁訴の語が絶えず繰り返される間に、も一人の息子を生んで、死に失せた子供を取り返したいと言ふ欲求が、彼の女に起つて來た。

彼の愛らしい笑ひがも一度見たい、あの柔和しい輝きを持つた瞳、あの静かなはき／＼した話し聲、あゝもう一度それを取り返し度い。日が照ると河が蠱惑的に眩しく輝き出すあの七月に、生きてゐたあの子のやうな、無垢な美しい童となつて再び返つて呉れたら、あゝ何んなに嬉しいことだらう！。

彼の女はしばし悦ばしい空想に恍惚としてゐた。

彼の女は胸に燃ゆる情火のために美しくなつて、やがて突き遣られたやうに夫の愛を求めた。そして穩順やかに哀訴したのであつた。彼の女は嬌態を作つて、夫を誘惑しはじめた。けれども牧師の陰慘な顔には未



だ恐怖の色が漂つてゐた。彼の女は十年以前の若かつた時代に在つたやうな、優しさと艶めかしさを以て、一途に彼を引き着けようとして焦つてゐた。そして處女のやうなことやかさと、無邪氣さをその顔に現はしながらさゝやいた。けれども酔した彼の女の舌は自由にきかなかつた。細い睫毛の間からは、情慾の火が、より激しく、より鮮やかに燃えてゐた。

然し牧師の顔にはまだ恐怖の色があつた。彼は燃ゆるやうな頭を、兩手で凝乎と押さへて力無げに私語いた。

「嫌だ、嫌だ！」

妻は彼の前に跪づきながら、嗔聲を上げて訴へた。

「お慈悲ですからワシヤを返して下さい。私の牧師さん！ も一度私にあの子を返して下さい。ねえ！ あの子を返して下さいよう！ でなけ

りや貴方は罰當りだわ」

堅く閉ぢた窓には、秋の雨が強く叩きつけてゐた。恐ろしい夜は、深く重く大息を洩してゐた。壁と眞闇とで以て社會とそして凡らゆる人生とから離れて、彼等は逃げ道の無い、狂はしい魔の如き夢の暴風の中に轉がり廻つた。そこには絶え間無い呪訴と愁訴とが在つた。狂氣そのものも戸口に立ち止つてゐるのだ。自熱した空氣はその呼吸である。彼の瞳の赤い洋燈の灯は、黒く煤ぼけた罩蓋の底に消えようとしてゐる。

「嫌やなんですか？ えゝ嫌やなんですか？」

牧師の妻は叫んだ。そして母たらうとする激しい欲求のために、衣服をも引き裂いて、羞づかしげもなく裸體となつた。恰かもバツカス神に仕ふる女のやうに眞赤になつて、恐るゝ、氣の毒なほどいじらしい聲で、



「嫌やなんですか？ え、？ ちや私神かけても言ひますよ。私戸外へ出て行きます。裸體のままで。そして誰の首にでも捉まれますよ。……ワスヤを返して下さい！……罰當り」

彼の女の激情に、無垢な牧師は遂負けてしまった。

長い秋の夜の歎息とそして狂はしい言葉との響きの中に、永劫に虚偽なる人生が、その暗黒な秘密に充ちた裾を現はさうとするかのやうに見えた。

ぼんやりした牧師の意識の中に、ある思想が稻妻のやうに閃いた。それは莊嚴な甦生と、そして昔日の奇蹟の可能と言ふ思想であつた。

牧師は妻の激しい情慾に、今まで潔白な羞恥心を以て對してゐたが、彼は遂に同じ激情を以て之に應じたのであつた。その中には輝やかな華やかな希望と祈りと、そして犯罪人の限てし無い絶望とが、ごつちや

に錯綜して在つた。

夜も静かに更け、妻も眠入つた時、牧師ワツシリーは杖と帽子とを手に取り、着替へすることもせず、古めかしい天竺木綿の法衣を纏つたまま、野邊へ逍遙ひ出た。

微細な水氣は、冷やかな濕つばい層をなして、ふやけた野面一杯に横たはつてゐた。空間は大地のやうに眞黒に、そして大いなる寂寥は、秋の夜を呼吸してゐる。その暗闇の中に、人はあとかたも無く消え失せた。杖が路上の石に打衝つたとき、一瞬の間沈黙を破つたが、周邊は再び元の寂莫さに歸つた。そして永遠より永遠に流れるかと思はれるやうな、深い長い沈黙がはじまつた。死んだ様な水氣は、彼の氷のやうな腕に觸れて、微かな音を立てる。木の葉は死んだやうに動かない。呼ぶ者も、叫ぶ者もなく、愁息も聞こえて來ない。長い死の寂莫である。



遙かに人家を放れた村の後方に當つて、闇の中に見えざる人の聲が聞こえて来た。それは丁度大いなる寂寥の愁息が洩れ、窒息したかのやうに陰惨に響いた。然し彼の言葉は天の日のやうに鮮やかであつた。

「私は信ずる！」

威嚇と哀訴と警告と、そして希望とが、その中に潜んでゐるかのやうに思はれた。

0  
2、2、2、2

(三)

春になると、牧師の妻は一層希望に輝いて来た。彼の女は夏中酒を謹しんだ。そして牧師の一家には、平和と悦樂との團樂があつた。けれども見れざる魔の影は、絶えず惨虐にも彼等を襲ひつゝあつた。

もう賣り時期トキになつた十二貫目もある肥よつた牡猪がゐなくなつたかと思ふと、今度は娘のナストヤが體中に瘡かさが出来て、容易に癒らうともしなかつた。けれども此處ことは、決して堪へ難いことではなかつた。むしろ牧師の妻は、心秘ひそかに喜こんでゐる位だつた。彼の女はやがて來るべき大きな幸福のことばかりを懸念して、之等の些少な禍ひは、當然その幸福のために拂はるべし租税でもあるかの様に思つてゐた。彼の女は、高價な牡猪を失つたときにも、ナストヤが長い間病苦に悩んだり、その他色んな悲しい出来事が起つた時にも、生れて來る兒こを愛撫してやることには換へられないことだと思つた。そののみか彼の女は、その兒のためなら、たい家やナストヤ等許りではなく、彼の女の生命も、靈魂も、限り無い犠牲を要求もとする見えざる無慈悲なるものに、喜こんで與へてもをしくないとすら思つてゐた。



彼の女の容貌は美しくなつてきた。そしてイワン長老を恐れることも忘却わすれてしまつた。

教會で自分の席に着いた時には、しとやかに丸々と肥ふとつた身體を、衆人の間に置いて、大膽な而も自意識の強さうに見える眼眸を、人々に向けるのであつた。

腹の中の兒のためにならないと聞くと、家の中の苦しい仕事を廢めて毎日山の中へ這入つて、茸狩りなどをして遊んでゐた。然し彼の女は、茸で出産の吉凶うらなを占ふほどまでに、未來のことを氣にしてゐた。占うらなひは、十中の八九まで吉が出た。

彼の女は、日光も通らないほどどんもりとした緑陰の下で、暗く濕つた去年の落葉が、堆積してゐる中から、屢々ひとびれの白い茸を見つけ出した。茸はその頭をどつちやに寄せ合つてゐた。そしてそれは頭の黒い、

無邪氣な、可愛かほゆさと同情とを惹き起こさせる兒童わらわのやうに見えた。

獨り居る時、何やら愉快な氣分がこみあげて來て、われ知らず出る罪の無い笑ひを浮べながら、彼の女は纖維質の灰色の土を、茸の根元に掻き集めて、その側ら近く坐まつた。

彼の女の顔は、緑色の陰影を受けて、幾分蒼味がかつてはゐるが、美しく見えた。彼の女は自分のしとやかに自分を喜んでゐた。

斯うして彼の女は、懷妊はらみ女らしい足元の踰跟さに氣を附けながら、靜かに歩いて行つた。小さい茸の生えてゐる密林は、生氣に充ちて、懷しげに、そして思慮深さうに見えた。

彼の女は一度、娘のナストアヤを連れて行つてあつたが、自由に放たれた仔狼こおほかみのやうに小躍りして、周邊あたりの叢の中を荒れ廻つたりして、彼の女の靜かに空想に耽ることを妨げたので、それつきり娘を連れて行かなかつ



た。

冬も静かに平穩に過ぎていった。

晩になると牧師の妻は、小さい子供のシャツと襦袢とを縫うた。白い細い指先で、布の皺を丁寧<sup>ちんげん</sup>に伸ばした。洋燈の明るい光は、その上を照してゐた。

彼の女は手を當て、<sup>みどりこ</sup>嬰子を撫でるやうにして、その柔らかな布を伸し直した。そして彼の女はもう母親になつたやうな、異様な感じに浸つてゐた。

洋燈の蓋の青い陰影に坐つてゐた牧師の眼には、彼の女のその聖い美は、内から輝く柔かい光に照らされてゐるかのやうに見えた。

牧師は、不注意なことをして、妻の美はしい、<sup>たのしみ</sup>悦樂<sup>かんが</sup>い想へを邪魔しては不可<sup>い</sup>ないと思つたので、スリッパを穿いて、足音を立てぬやうにそい

つと室内を歩き廻つた。

彼は不圖その時、自分等の不足無い部屋を、朋友のやうに親しくそして心地好く思つた。彼には、妻もその他凡らゆる物が人並であつて、その中から深い静かな平和と悦樂とが涌き出て来るかのやうに思はれた。

彼の靈は微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。そして彼はその額の眉毛の間から、ある大きな苦痛の魔の影が、潜み入つたのを知らなかつた。いや知ることが出来なかつたのだ。

此の一瞬時の平和と休息との間にも、一つの苦悶の謎のやうな運命が、彼の生命に付き纏うてゐたのである。

三聖帝祭の日に妻は男の兒を生んだ。  
名をワツシリーと附けた。

大きな頭、細つそりした足、そしてキョトンとした圓い眼、それは近



眠らしく、そして凡てが白痴らしい鈍さをもつてゐた。

彼等は三年の間心配したり、疑つて見たり、また頼母たのもしく思つたりして暮して来たが、遂々とうとうワツシリーは全くの白痴であることが分つたのであつた。

狂氣の中に受胎した彼は、白痴として此の世に生を享けたのである。

(四)

激しい苦惱に麻痺しびれたまゝ、また一年は過ぎていつた。

此の不幸な兩人が、自ら氣を勵しつゝ、起ち上つて、周圍を見廻した時、彼等は、彼等の生活も思想も凡て、あの恐ろしい白痴兒の影像に附き纏はれてゐることを發見した。

ストーブは何時ものやうに燃やされてゐた。そしてお互に家事上のことや、彼等の仕事のこと等を語り合つてゐた。けれどもそこには、ある新しい恐怖の兆きざしがあつた。

誰も生を享樂たかしまふともせず、萬事がめぢや／＼になりかけてゐた。

傭人は怠惰こまけもの者で、命令杯を聞かうともしない。それどころか、時とすると理由も無く逃げて行つたり、或はまた新しい傭人が、二三日の間に何か斯う不安に襲はれて、遂憎け出して強情になつたりした。

午餐ひるめしが早や過ぎたり、遅過ぎたりした。そして食卓には、きつと牧師か妻か娘の中誰か一人が缺けるのであつた。

シャツや着物等は、もう始終破けてゐた。妻はまた何時も夫の靴下を繕つくろはねばならぬと言つてゐる。彼の女は何時も繕つてゐるらしいが、靴下は始終破けて、牧師は靴擦れくつすりのために足を痛めてゐた。夜になると南



京虫が這ひ出す。凡らゆる物の裂け目や壁の隙間等を引つ掻き廻して掃除はしたが、その怖ろしい襲撃を免れることは出来なかつた。

彼等は何處へ行かうと、また何を仕ようと、此の暗い部屋の中に、恐ろしい白痴として生れて来た兒のことを、一瞬の間も忘れることは出来なかつた。太陽が輝やいてゐる戶外へ出ようとする時など、後を振り向くまいと努めても、何うしても顧みない譯にはいかなかつた。

心無い木造の家屋すら、此戦慄すべき出来ごとを自覺してゐるかのやうに彼等には思はれた。それは恰も壁の内側に隠されてある恐ろしいものを見せようとして、身をかがめて匍匐うやうにすら思はれるのであつた。そしてその視据ゑるやうな窓、堅く鎖した戸が、死の懊惱の叫びを制することが出来ないものゝやうに思はれた。

牧師の妻は、時折り副牧師の妻を訪ねたが、坐つてゐる間すら沈黙い

てゐることは出来なかつた。丁度白痴兒と彼の女との間に、蜘蛛の巢のやうな微細い糸が引張られて、永劫に二人を縛めてゐるかのやうに思はれた。假令彼の女が、世界の果てまで飛び去るか、或は寺院の高い塔の壁の蔭に隠れるか、或は死んで了ふかしても、その微細い糸は、墓穴の底までも伸びていつて、不安と恐怖とでもつて、彼の女を訶嘖まうとするかのやうに思はれた。

彼の女にはまた夜の安らかな眠りすらも、恵まれてゐなかつた。眠る者の顔に表情はないが、その頭腦の中には、恐ろしい夢の魔の創り出す幻の世界が現出されるのであつた。そこには常に、半身が兒童で半身が動物の恐怖しい謎のやうな影像があつた。

子供は四歳になつても未だ歩けなかつた。

「ちやうだい」と言ふことすら出来ない。意地悪な上に物欲しがりで、



若し人が彼の意に逆らひでもしようものなら、野獸のやうな叫び聲を出して、鷲掴みのやうな手つきをして指し伸す。その所作の可愛げなきは、まるで動物的であつた。始終何か手に持つものが無くては承知出来ないので、若しそれを別のと取り代へようとしてもしようものなら、何時も大騒ぎをやるのであつた。それだから驅してまばたきする間に取り上げなければならなかつた。若しさうでないに母や姉の頭に爪を立て、手で髪を引つばつて、束毛を引き撈つて了ふのであつた。

一度彼はナスタヤに噛りついたことがあつた。するとナスタヤは、彼をベッドの上に投げつけて、恰も人間でも子供でもなく、たゞ一塊の悪肉でもあるかのやうに、しばしの間容赦なく彼を打擲した。それ以來彼は、噛みつく癖が出て、犬のやうに齒をむき出した。

此の子供に食事をさせるのが、また一つの大きな苦痛であつた。食ひた

がつてるくせに怒りつぼくて、自分のしたいと思ふ事を、人に妨げられると直ぐに機嫌を悪くする。皿を投げ散らかして自分で呑み込み、鷲掴みの手つきで他人の髪の毛を搔撈しらうとする。然し何よりも悚然とするのは、その厭らしい容貌である。小さなまだ子供らしい肩の上に、頭蓋は割に小さいが、大人の顔のやうな大きな異様な、表情も何もない顔が乗つかつてゐる。此の身體と頭との無恰好な、不釣合な容姿は、彼等にあらる不安と恐怖とを感せしめるのであつた。

苦悶のあまり牧師の妻は、また昔しのやうに酒を飲み出した。彼の女は本性を失つて、遂に病氣になるほど多量に飲んだが、アルコールの力では、まだ彼の恐ろしい異様な容姿をした子供の執念く附き纏つてゐる鐵の鎖から脱け出ることは出来なかつた。

彼の女は以前のやうに、失つた子供の、影の淡くなつた悲しい記憶を、



焼き附くやうに想ひ浮べやうとした。けれど以前のやうな回想は浮んで來なかつた。つれない死の荒野は、今はもう一つの音調も、一つの影像も、彼の女に與へなかつた。

熱した頭腦の、あらん限りの力を出して、温和な可愛い兒の顔を想ひ浮べようとして、彼が嘗つて唄つた古い歌を唄つたり、彼の笑ひを眞似たり、食べ方を眞似たりして、黙したまへ、一息にぐいぐい水を呑んだ。そして、子供の傍にゐるやうな氣持になつたかと思うと、今度は大きな激しい惹き付けられるやうな苦痛が、彼の女の心の中に燃えて來るのであつた。忽ち耳や眼が遠くなつて、凡らゆるものが床の下に沈んで行つて、遂に消え失せてしまう。そしてその冷めたい死の荒野には悚然とするやうな。表情も何も無い白痴の兒の假面が現はれて來る。

彼の女はも一度ワスヤを葬つて、地の底に深く埋めた様な心持ちがし

た。彼の女はその底の方に、凄い異様な影像が、厚かましく蹂り込んで威張つてゐる彼の頭を叩き毀したら、どんなに生々するだらうと思つた。

彼の女は苦痛に堪へ得ないで、部屋を轉げ廻つて夫を呼んだ。

「ワッシリー！　ワッシリー！　はやく來て頂戴てばよう……」

パーテル・ワッシリーは黙しながら來て、隅に身を寄せて坐つた。彼は、叫び聲も、狂氣じみたことも、そして苦惱も、何事も無かつたかのやうに沈靜にしてゐた。彼の眼は窪んでゐた。そして重苦しげな圓い額の眉毛の下に二つ、深く澄んで開いてゐた。彼の瘦せこけた容貌は、よく見るとまるで鬮體のやうであつた。

彼は骨ばつた手で顎を支へて身動きすらしなかつた。

妻はまた何事か起つたやうに、ヒステリックな周章てかたで、白痴の子の寝てゐる部屋の戸を堅く開かない様にし始めた。椅子や卓子を一緒



に寄せ集めて、枕や衣類をその上に投げかけた。けれども彼の女はまだ物足りないので、酔つた力にまかせて、重い古い置戸棚を揺り動かし、床の上を引摺りながら、戸の方へ押し寄せた。

「椅子を除けて下さい！」

彼の女は息を切らして叫んだ。牧師は黙つたまゝ起き上つて、椅子を取り除けてやつた。そしてまた元の處へ来て坐つた。

彼の女はその一瞬の間、安心したかのやうに坐つて、胸に手を當てながら、重苦しげに息を抑へた。然し彼の女はまた直ぐ飛び上つて、耳から垂れ下つた亂れ髪を掻き上げながら、ひどい恐怖に襲はれたかのやうに、壁の後に聞える妄想の呻めきに耳を傾けてゐた。

「聞えるかヘワツシリー、え？ 聞えるの？」

二個の眞黒な何物か、彼の女を見つめた。そして無頓着げに、遠方

から聞えて来るやうな聲が答へた。

「彼處は静かだ。あの兒は眠つてゐる。沈靜になさい、ナストヤ」

すると彼の女は子供のやうに晴々と悦しさうに笑ひ、躊躇ひながら椅子の一方に腰を下した。

「ほんとなの？ え、寝てゐるつて、お前自分で見たの？ 嘘言吐いち

や駄目よ。嘘言を言ふのは罪惡だわ」

「ほんとだよ。兒はよく眠むつてゐる」

「ちやあすこで話してるのは誰？」

「誰も居やしないよ。お前がたゞさう思うに過ぎないんだ」

牧師の妻は輕やいだ氣分になつて、痛高に笑ひこけた。巫山戯たやうに頭を振り、妙な手つきをして、一方の隅の方へ行つた。

それは丁度、誰か悪い申談をして彼の女の後を追ひ驅けるのを、彼の



女はそれを見透かして、たゞ笑つてゐるかのやうに見えた。

此の淋しい笑ひ聲は、限て知れぬ深淵に落ち込む石のやうに、何等の反響もなく消えていつた。そしてその唇は笑ひのためにまだ歪んでゐた。然し彼の女の眼には、もう冷やかな苦痛の影が浮んでゐた。

部屋の中はまた、誰も嘗て笑つたことのないやうな寂寥さに歸つた。

投げ出された枕、轉倒した椅子、それ等は實に異様なすがたに見えた。重い戸棚は、見慣れない場所にぼんやり立つてゐる。それ等の中に、恐ろしい呪はれた悪運の神の使か、或は嘗て人間の見たことのない怪物が潜んででもゐるかのやうに彼の女には思はれた。

彼の女は牧師の方を振り向いた。暗闇の隅の方には、陰惨な、灰色の長い直立した、輪郭のぼんやりしてゐる幽霊のやうなものがぬゝつと立つてゐる。彼の女は夫の方へ身を伸した。するとその顔が彼の女を覗き込

んだ。けれどもそれは、眉毛の黒い影に隠れてゐる瞳で見るとはなかつた。飛び出た頬骨と、白い額の艶とで以て覗くのであつた。彼の女は何時ものやうに苦しげな重い呼吸をして、私語くやうに愁訴した。

「ワスヤ！ 私はお前がほんとに怖い。ねえ、お前どんな顔をしてるんだらう？ 明かるい方へ来て御覽」

バーテル・ワツシリーは柔温しく卓子の方へ近寄つて行つた。洋燈の温い光が彼の顔を照した。彼の顔には、温かみはなかつたが、隠やかで、苦痛の色は見えなかつた。彼の女はそれを一瞥して安心した。彼の女は唇をバーテル・ワツシリーの耳元近く寄り寄せて、私語くやうに言つた。

「私の牧師さん、ねえ、牧師さん？ お前ワスヤの事考へてるの……あのワスヤの事を？」

「いゝや……」



「ほんと？」彼の女は悦しげに言った。「お前も考へてゐないの？ 私も考へちや居ないわ。牧師さん、お前心配してるの？ え、心配してるの？」

「いゝや……」

「なせ床の中で歎息するの？ え、なせなの？」

「たい氣分がよくないからだ」

牧師の妻は意地悪げな笑みを浮べた。

「氣分が不可なんですつて？ え、氣分が不可なんですつて？」

彼の女は牧師の骨張つた廣い堅胸を、指先で突いた。

「なせ嘘言を吐くの？」

パーテル・ワツシリーは沈黙した。妻は怫然として牧師の冷やかな顔を見据ゑた。永い間手入れをしてない彼の髻は、憔悴れた頬の幼毛の中

に纏れ上つてゐた。彼の女は忌々しさうに肩を聳かした。

「まあ何て顔なんだらう！ 憎らしくつて、見つともなくつて、冷淡で、

まるで蛙みたやうね。あの子があんな容姿で生れたのは、私の罪か知ら

？ お前どう思つて？ 何をそんなに始終考へて許りあるの？」

パーテル・ワツシリーはたゞ沈黙してるのみだつた。そして凝乎と射透

すやうな眼で、妻の腫んだ痛ましげな顔を見詰めた。彼の女の亂暴な話

しの最後の聲の音が消え失せた時、部屋は再び、丁度鐵の環を以て、彼

の女の頭上を壓しつけるやうな、恐ろしい死の寂寥さが歸つて來た。

「けど、わたし知つてるわ、知つてるわ！ よく知つてるわよ、牧師さん」

彼の女は言はうとも思はなかつた言葉を、慌たゞしく胸から絞り出した。



「何を知つてるの、お前？」

「お前何を考へてゐるか自分に解つて？」

牧師の妻はその次を言ふのが、如何にも心苦しう堪らぬやうに夫の傍から身を退いた。

「お前はもう神様を信じて居ないんだわねえ、さうでせう！」

然し斯う言つた彼の女は、直に恐ろしい事を、言つたと言ふことに氣づいた。そして彼の女は、火酒に燃えて腫れ上つた血のやうな眞赤な唇を開けて、許しを乞ふかのやうに、また愁訴するかのやうに笑つた。

牧師は蒼然になつて、直ちに妻の言葉を斥けた。彼の女はそれで却つて嬉しく思つたのであつた。

「そんなことを言ふものではありません。お前は物を考へてお話しなさい。私は神様を信じてゐる」

彼は沈黙した。そして再び深い寂莫が歸つて來た。けれども牧師の妻の物懐しさうな、温い優しみが周邊に溢れてゐた。彼の女は眼瞼を閉ぢて、恥づかしげに言つた。

「ワスヤ、私何か飲みたいの。飲んでもいいこと？ 飲むと早く眠れるわ。それに大分遅いのね」

彼の女は火酒を、四半分ほど洋盃へ注いだ。けれども彼の女は、躊躇ひながらも少し注いだ。そして彼の女は如何にも婦人らしい手つきで、息をもつかずに飲み乾してしまつた。胸は熱して來た。彼の女は悦樂と賑々しさと、明るい輝やかしさと、そして高らかな人聲が欲しかつた。

「私何かしたくなつたわ、ワスヤ、骨牌をしようね、ナストヤを呼んで。「婆摺」がいと思ふわ。きつと面白くなれてよ。私遊びたい！ ワスヤ。お願いだからあの娘を呼んで頂戴よねえ……。私接吻して上げるわ」



『もう眠つてゐる。それに夜も遅い』  
妻は足で床板をどんと鳴らした。

『起こして下さいてばよう！』

ナストヤは来た。瘦せこけて、丈は父のやうに高い。仕事をするので、手が太つて荒れてゐた。彼の女は悪寒のために慄へながら、首巻で身體を纏んだ。そして骨牌の札が揃つてゐるかどうかを調べた。

彼等は面白い馬鹿遊びに取りかゝるために、家具が動したり顛倒したりしたまゝになつてゐる部屋の中に、沈黙して坐つた。夜も更けて、人も動物も荒野も、凡らゆる物が深い眠りに沈んだ。

牧師の妻は、戯談を言つたり笑つたりしながら、骨牌を引いた。他の者も話したり笑つたりした。けれども彼の女の言葉の最後の音が、消え失せるか失せない中に、もう已にまた死のやうな脅やかすやうな寂寥さが

彼の女の上に迫つて来て、呼吸を窒らせた。

そして沈黙した二對の骨ばつた手が、音をも立てずに、靜かに卓上を動いてゐるのを見ると、その手にのみ生氣があつて、手の持主の方は死んでゐるかの如くに思はれて、彼の女は慄然とした。

酒の酔ひが出て、もの狂ほしくなつて来た。彼の女は跳ね上つた。そして何か超自然的な事の起つて来るのを待ち構へてゐるかのやうに、卓上の空間を凝乎と見詰めた。

二つの冷やかな、二つの蒼白い、二つの陰惨な顔が、淋しさうに暗闇の中からぬつと出てゐる。それがやがてぬら／＼と異様な沈黙の舞踏をはじめめる。二つの冷やかな陰惨な顔！

牧師の妻は何か口の中で呟いてゐる。そしてその骨ばつた手は、また靜かに音をも立てずに動いた。寂寥の神秘的な響きが聞えて来る。



第四の手が現はれる。その鷲掴みに曲り返つた手が、骨牌を交せる。そしてそれが牧師の妻の方に向つて、蜘蛛のやうに膝を這ひながら、彼の女の咽喉を目がけて上つて来る。

「誰だ！」

牧師の妻は斯う叫んで、席から跳ね上つた。皆のものがもう立つて、心配さうに彼の女を見つめてゐた。それはたゞ二人、——夫と娘のナストヤのみであつた。

「氣を落ちつけなさい、ナストヤ。俺達の外誰もゐないぢやないか」

「そしてあの兒は」

「寝てゐる」

牧師の妻は坐つて、しばし耳を澄ましてゐたが、また跳び上つて、ひたと夫の方に身をすり寄せた。パーテル・ワツシリーの顔色は、人善げに見

えた。

「ワスヤ、若しあの兒が動き出したら私何うしよう」

「今夜私が夕餐を持つて行つてやつたら、あの兒が足を上げてよ」  
ナストヤは答へた。

「ほんとかねナストヤ？」

牧師は尋ねた。然もそれは、陰惨な遠くから響いて来る聲のやうに思はれた。

不圖、凡らゆる物が熱狂した渦巻の中に旋轉しはじめた。灯も暗闇も動揺し、四方から眼の無い幽霊が、牧師の妻の方へ押し迫つて来た。それ等のものは、暗闇を衝き抜いて、たゞ一人彼の女の上にも襲ひかゝつてきたのだ。そして彼の女の着物を引き裂き、咽喉を絞め、髪を掴んで何處かへ曳き摺つて行かうとしてゐる。彼の女は爪を引き剥がして、床



板に搔ぐりついて叫んだ。そして頭を掉りながら、逃げ出さうとして着物を脱いだ。

彼の女は狂的な力を出して暴れ廻るので、牧師とナストヤだけでは、どうすることも出来なかつた。それで下女と下男とを呼んで、四人して漸々彼の女を取り押さへた。そして手足を手拭で縛りつけて、床の上に寝かせた。

パーテル・ワツシリーは一人彼の女の傍にゐて、身動きもせずに見守つた。

彼の女の身體は痙攣的に歪み、涙は閉ぢた眼瞼の中から涌き出てゐた。

「助けて！……助けて！……」

彼の女は嗄聲で叫んだ。その淋しい、救ひを要求する叫び聲は、凄い響きを立て、周邊を震動させた。然し何物も答ふるのは無かつた。陰鬱な

寂寥さが彼の女を圍繞し、彼の女は丁度死の衣の中に包まれてゐるかのやうに思はれた。

異様に轉倒した椅子は、上の方に足を長く延ばしてゐた。そしてその褥裏は、羞にかむかのやうに光つてゐた。古い戸棚は顔を歪めて、諦らめてゐるかのやうに見えた。

夜は深い沈黙に落ちてゐた。淋しい救ひを要求する叫び聲は、だんく微かに、愁訴するかのやうになつた。

「助けて！ 苦しい！ ワスヤ、愛しいワスヤ！」

ワツシリーは沈靜に落ち着いて、身動きすらしなかつた。彼は、半時間ほど前に、妻がしたやうに、手を上げて頭を抑へた。そしてその手を靜かに下ろした。その下ろした指の間には、灰色の髪が微かに震へてゐた。



職業上のことや相談ごと等で、交際して行く人達の間になつても、バ  
ーテル・ワツシリーは皆から人間扱にされてゐなかつた。

たゞ譯もなく蠢動<sup>ウツク</sup>いてゐる肉塊か何かのやうに思はれてゐるほど、其  
麼に孤獨であり且つ變物視されてゐたのだつた。

彼は他人<sup>ひと</sup>のすることは何でもしてゐた。話しもしれば働らきもする。  
食ひも飲みもした。然し事實は、彼は他の人間の未だ理解出来ない神秘  
の世界に生活してゐるので、ただ生きた人間の動作を、真似てゐるに過ぎ  
ないやうにも思はれたのであつた。

そして彼を見たものは誰しも、自分自身に斯う問うて見るのであつた。

「この人は何をそんなに考へ込んでゐるのだらう？」

彼の動作の凡てに、深い瞑想の附き纏つてゐると言ふことは、明らかに  
誰の眼にも讀まれた。彼の重々<sup>おもむ</sup>しい歩調、そしてあの静かになる吐辯、  
その二つの言葉の間に、深遠な思想が、黒い口を聞いてゐるかのやうに思  
はれるのであつた。

その瞑想は莊重なヴェールのやうに、彼の瞳にもかゝつてゐた。そし  
てその叢のやうな眉毛の間に、艶もなく輝いてゐる特りなげな眼瞼は、  
深い憂愁に沈んでゐた。

二三度も續けざまに呼ばなければ、返事しないことがよくあつた。他  
人に挨拶することも忘れがちなので、高慢だと言ふ謗りも受けた。ある  
時彼は、イワン・ポルフィリツチに挨拶しないことがあつた。イワン長老  
は少なからず驚いた。そして静かに行き過る牧師に、急ぎ足で追ひつい



て、

「貴方は高慢におなりですね、牧師さん。これからは挨拶しないことにしたんですかね」

と嘲弄的な調子で言つた。

バーテル・ワツシリーは當惑したらしく、少しく顔を赤らめて、彼を眺めながらその無作法を謝罪つた。

「とんだ失禮を致しました。遂お見外れしましたものですから」

長老は牧師を蔑視むやうな、厳格な態度を取つたが、彼はこの時はじめて、村中第一の人物である自信を持つてゐる自分よりも、牧師の方が一段崇高い人のやうに思つた。彼は何となく懐しいやうな氣がして、われ知らず丁寧に彼に挨拶した。

「まあもつとこちらへいらつしやい」

長老はつくづく牧師を見詰めた。牧師も亦愉快な氣分になつてあつたが、それはほんの一瞬の間であつた。二歩足を運ぶ中に、絶えず走馬燈のやうに廻轉する彼の瞑想が、容赦も無く、長老の親切な言葉を追想することを許さずに、途切れさせてしまつた。彼は臆病らしい微笑を、口元で抑へた。

彼は更に瞑想をついけた。神と人と、そして謎のやうな人間の運命に就て。

懺悔の時に次のやうな事件が起つた。

苦しい瞑想に陥つたバーテル・ワツシリーは、一人の老婆に對して、いつものやうに問ひを發したが、その時彼は今まで氣がづかなかつたある矛盾を覺悟つて驚嘆した。



彼は起つて、平氣で他人の胸深く包んだ秘密を問ふのである。そして人々は、羞づかしい思想や、未だ嘗て誰にも打ち明けたことのない眞實を、彼に披瀝するのである。

その時の老婆の皺くちやな顔が、不思議にも晴々しく見えた。恰も周邊は闇夜であるに拘らず、その顔にのみ日の輝やきが落ちてゐるかのやうに思はれた。

牧師は文句を切つて、唐突に意外の問を發した。

「お前さんは眞實のことを言つてるのかね、婆さん？」

それに對して老婆が何と答へたか、それは一寸も牧師の耳には這入らなかつた。

彼は眼の前が靄に被はれたかのやうに思つた。彼は洗ひ聖めたやうな輝く瞳で、不思議さうに老婆の顔を見詰めた。その顔には異様な光が射

してゐた。そして神と人生との謎のやうな眞理が、その裡に潜んでゐるかのやうに見えた。

パーテル・ワツシリーは、老婆の頭の更紗布の間に、彼の女の顱頂を見た。その丁寧に撫でつけた白髪に分け際が見えた。

この見すばらしい顱頂、そして古い汚い誰にも用のないその頭を、丁寧に手入れをするのは、たしかに何等かの眞理が其處にあるのだ。永遠に淋しい、そして永遠に苦悶する人間の存在の、悲しい眞理が在るのだ。

彼は四十歳の生涯に、此處ではじめてあるものを理解した。彼は自分以外に、此の地上に猶人の生きてゐることを、瞳と耳とそして凡ての感官とを以て、はじめて悟覺つたのであつた。

「お前さんには子供がお有りかね？」

「皆んな亡くなりましたただ先生様」



「皆んな亡くなつたつて？」

「はい、……皆んな……」

斯ふ繰り返した老婆の眼は赤くなつてゐた。

「それちやお前さん何うして暮してゐるんだね？」

牧師は驚いたやうに尋ねた。

「私の暮しつて別にお話しするほどのこともありませんねえだ先生様！

私は人様の恵ぐんで下さるもので、露命を繋いで居りますだよ」

パーテル・ワツシリーは頸を伸して、黙したまゝ高座から彼の偉大な體軀を、老婆の眼の中に揉み込まうとするかのやうに凝乎と見詰めてゐた。

彼の長い瘦せた顔には、髪が垂れかゝつて、老婆にはひどく恐ろしく見えた。彼の女の胸に上げてゐた手は冷たくなつて來た。

「行きなさい！」

莊重な聲が彼の女の頭上に響いた。

パーテル・ワツシリーには特別な生涯が開展されて來た。

これまで嘗て無かつたことが、彼の頭腦に起つた。この小さい地上に、神秘的な異様な悲痛と疑惑とを抱いて住んでゐるパーテル・ワツシリーは、他の人には決して此麼經驗はないのだと思つてゐた。

今や地上は測り知られぬ程廣大なものとして彼に現はれて來た。其處には彼と同じ人類が生存してゐる。而もある大きな矛盾を把持しながら、各自が各自の生活をなし、苦痛に虐げられ、また希望や疑惑を抱いてゐる。

パーテル・ワツシリーは、まるで彼等の中に在つて、野中の一本杉のやうに思はれた。處がその周邊には忽ち鬱蒼とした密林が雲を衝いてゐる。



かのやうに見えて来た。寂寥さは消え失せた。日の光は没し、荒原は潜み、光は遠去つて、夜の暗闇は更に／＼深くなつた。

凡ての人々は彼に眞理を明かした。

彼等が假令眞實ほんたうの話しを聞かせなくとも、彼等の家と彼等の顔とは、明らかに眞實を語つてゐた。彼等の家と顔とは、生活の上に執念く附き纏つてゐる眞理が、深く刻み込まれてゐた。

彼は此の眞理を解しても、言詞ことばの上にそれを表現あらわはすことは不可能だつた。

彼は斯くて新らしい顔と、新らしい話しとを、探し求めたのであつた。クリスマスクリスマスの斷食の日に懺悔するものは、極く僅かだつた。

然し牧師は、長いこと一々執拗に、靈魂の潜める奥までも、——人間自ら窺ふことをせず、また窺ふことを恐れてゐる奥までも追究して尋ね

た。

彼は何を要求してゐるのか、自分で自分が分らなかつた。而も彼は靈魂の所有者、靈魂を育みつゝある者の凡てを、執念く尋ね立てるのであつた。

彼の質問には、人情も恥辱も何もなかつた。そして彼の思想の發展は、しばしいぢけることをしなかつた。

斯くしてパーテル・ワツシリーは、恰かも神に對するやうに、彼に對して眞實を物語つた人々自身が、すでに自分で自分の生活の眞實を理解してゐないと言ふことを悟覺さとつたのであつた。

彼等の背後うしろには、限り無く小さく碎けた撞着する眞理が、一つの渾然とした、普遍にして妥當なる眞理の輪郭として、霧のやうに輝いてゐた。

凡ての人々が其れを見てゐるのだ。待ち焦れてゐるのだ。而もそれを



人間の言葉に表現することは誰しも出来ないのだ。——此の神と人間と、人間存在の秘密に充滿した運命の不可思議な真理を！

今やバーテル・ワツシリーは此真理を感じはじめた。而も彼は忽ち絶望し、狂ほしきまでに懊惱した。或る時はそれが忽ち慈悲の情となり、或る時は憤懣を感じ、或る時は希望が涌き出て来るかの様に思はれた。

そして彼は再び嚴肅になり、沈靜になるのだ。彼の悟性と情緒とは、不可知的な真理の焰の中に溶解し去り、そして古い骸には、新らしい生命が這入つて来たかの様に思はれたのであつた。

クリスマス最後の週間の火曜日に、バーテル・ワツシリーは教會から遅くなつて歸宅した。

暗い冷たい玄關口で、何物かにしつかと捕まへられたやうな氣がした。

「□ツシリー、中へ這入つちや駄目！」

痾高い聲が叫んだ。

彼はその心配し切つたやうな聲が、妻だと知つて立止つた。

「私、もう一時間も、お前を待つてたの。もうすつかり凍ぢけつちやつたわ」

彼の女は突然身震ひした。そしてその齒はがた／＼鳴つた。

「どうしたんだねお前、何か起つたのか？ まあ中へ入れて呉れ」

「いゝえ、這入つちや駄目よ。ねえお聞きなさい。私唐突にナストヤの部屋へ這入つたの。そしたら娘が鏡の前に立つて、あの子の顔を眞似たり、手眞似したりしてゐるんですの……」

「まあ中へ這入らう」

彼は斯う言つて、無理に妻を部屋の中へ引き入れた。彼の女は絶えず周邊を見廻し、寒さと不安とに戦慄しながら話し出した。



彼の女は花に水を灌がうとして、部屋へ唐突に這入つたのであつた。するとナストヤは鏡の前に佇んでゐた。鏡の中の娘の顔は、何時もと變つて異様にまがり、口は恐ろしく歪み、眼は藪睨みになつてゐる。そして彼の女は静かに手を舉げて、白痴兒のやうに痙攣的に指を曲げて、鏡に映つた自分の姿を指してゐる。

周邊はひつそりと静まり返り、無氣味な恐ろしさが、彼の女に迫つて來たので、彼の女はきやつと叫んで、水差を落してしまつた。ナストヤも喫驚して逃げ出した。

然し牧師の妻は、それが現であつたのか夢であつたのか、判然とは覺えてゐなかつた。

「ナストヤを呼んでおいで。お前自分で見て來たらいゝぢやないか」  
ナストヤは來た。そして闖の處に立つてゐた。彼の女の顔は、父のそれ

のやうに長く瘦せてゐた。牧師が立ちながら話すやうに、彼の女も立つてゐた。そしてまた父のするやうに頸を少し傾げ、額の下の陰鬱な瞳で見上げながら、手を背後へ廻してゐた。

「ナストヤ、お前はなぜあんなことをするのだえ？」

ワツシリは嚴格な、だが物靜かな調子で問うた。

「何になんですの？」

「お母さんがね、お前が鏡の前に立つてゐるのを見なすつたのだ。なぜあんな眞似をするんだね。あの子は病人ぢやないか」

「いゝえ、あの子は一寸も病人でなんかありやしないわ、あの子は私の髪を引つぱつたのだわ」

「でもなぜあの子の眞似なんかするんだね？ あの子の顔が好きかえ、お前は？」



ナストヤは忌々しげに傍を向いて、

「知らない！」

と言つたが向き返つて臆せもせず父の顔を見詰めながら、

「わたし好きです」

と言ひ加へた。

パーテル・ワツシリーは鋭どく彼の女を見守つて沈黙してゐた。

「お父さんはお好きぢやなくつて？」

ナストヤは半ば承諾を期待したやうな調子で言つた。

「嫌ひだ！」

「ぢやなせお父さんは始終あの子のこと許りを考へてゐらつしやるんです？ わたしあの子を殺してやりたい！」

パーテル・ワツシリーは、此の瞬間ナストヤが白痴兒のやうな顔つきを

したと思つた。幾分鈍い獸的な何物か、彼の女の顔面の筋肉の間に閃めいた。そして眼瞼を閉ぢた。

「ハ、ア！」

彼は荒々しい調子で言つた。

ナストヤは身動きもせず父の顔を正面に見詰めた。けれども彼の女の顔は、忌はしい白痴兒の假面に似てはゐなかつた。

「私のことは少しも思つて下さらないのね」

まるで自分と無關係のことでもあるかのやうに、單純に言つた。

冬の日の黄昏は漸次濃く深くなつていつた。彼等は、親子仲であるに拘らず、その簡単な調子の變つた話しの間には深い罅隙があつた。

「お前は私の娘だつたね。私はなせそれに氣づかなかつたのだらう？ お前さう思ひやしなかつたか」



「いゝえ」

「お父さんを接吻<sup>キス</sup>して呉れ」

「いゝえ、私そんなことしたくないわ」

「お前はお父さんを愛してゐないのだね」

「私は誰も好<sup>す</sup>かないの」

「そこまで私に似てゐるのか」

牧師の小鼻は、笑ひを抑へるために膨<sup>は</sup>れた。

「お父さんもやつぱり誰も愛してないの？ お母さんも？ お母さんは

ほんとに大酒飲<sup>おほざけ</sup>みね。私あの人も殺してやりたいわ」

「そして、私もか？」

「いゝえ、お父さんだけは違ふわ。お父さんは私と話しもして下さるし、それに私折々お父さんが可哀想になるの。人があんな頭の可笑<sup>おか</sup>しい子を

もつてたら、どんなに苦勞するでせうねえ。あの子は恐ろしい性悪よ。

お父さんはまだ知らないのね。あの子は黄金虫<sup>こがねむし</sup>を、生きてるまゝのを食べてよ。私十匹やつたら皆食べつちやつたわ」

彼の女は戸際を放れようともせず、椅子の縁につゝましやかに坐つて、下婢のするやうに、手を膝の上へ置いて待つてゐた。

「退屈だな、ナストヤ」

牧師は物想ひに沈みながら言つた。

彼の女は静かなしつかりした聲で同意した。

「ほんとに退屈だわ」

「お前はお祈りをするかね？」

「勿論しますわ。でも夕方だけよ。朝はちつとも隙がないんですもの。する事ばかり多くつて仕様がないわ。部屋を掃除したり、床を慥へたり、



什器を洗つたり、ワスヤにお茶を入れてやつたり、それにお守までしなくちやならないわ。——お父さん自分で知つてなさるくせに、ごれだけ仕事があるかつてことを——」

「まるで下女のやうだね」

パーテル・ワツシリーはおぼつかなげな調子で言つた。

「何て言つたのお父さん？」

ナストヤは聞き取れないで尋ね返した。

パーテル・ワツシリーは黙したまゝ首を低く垂れてゐた。彼の影は、淡く輝いてゐる窓の黄昏の光りの裡に、大きく黒く見えた。

ナストヤの言葉は水泡のやうに、暗い輝を見せて消えていつた。

彼の女はしばし待つてゐた。然し父は沈黙に沈んでゐた。彼の女は躊躇ひながら聲をかけた。

「お父さん！」

パーテル・ワツシリーは首を上げずに、一二度一方の手を動かした。

ナストヤは愁息を漏らしながら静かに起ち上つて戸口の方へ振り向かうとした途端に、後の方に音がした。二つの骨ばつた手が、彼の女を持ち上げた。それと同時に異様な聲が耳元に私語いた。

「首へしつかり掴るがいゝ。私が連れて行つてやらう」

「いゝことよ。私もう此處に大人になつてゐるんですもの」

「いゝよ。しつかり掴り」

鐵の輪のやうにしつかと抱きしめられたので、彼の女は息を吐くのも苦しい位だつた。

戸口の處で、頭を打たぬやうに身を屈めた。然し彼の女には、父が好意でするのか、面白がつてやつてゐるのか、少しも解らなかつた。



或はまた實際に父が「お母さんによくしておやり」と私語いたのか、それともたい、彼の女にそんな気がしたのか、それも分らなかつた。

ナスタヤはお祈りが済むと、寝る用意をしたが、しばらくの間床の縁に坐つて考へた。彼の女の瘦せた脊はまったく曲つて、肩胛骨はひどく飛び出し、脊骨は目立つほど出ばつてゐた。汚ない下着は、その尖つた肩から垂れ下つてゐた。そして彼の女は手で膝を抱きしめて、左右に動かしながら、荒野で悪寒に襲はれた黒い悪鳥のやうに、またある獸に似た單純な、謎のやうな鋭い眼で、凝乎と見詰めてゐた。

「でも私やつぱりお母さんを殺してやりたい」  
彼の女は沈んだ頑くなく、調子で私語いた。

夜が更けて、皆が寢靜つてから、牧師は部屋へ這入つて行つた。彼の顔は冷たくそして莊嚴であつた。

彼はナスタヤの方へ見えないやうに、洋燈を床板の上に置き、そしてすや／＼と深い眠りに落ち込んでゐる白痴兒の方へ、身を差し伸した。

彼は仰向けに臥つてゐた。胸は無恰好に飛び出し、そして手は横の方へ投げ出してあつた。縮み上つたやうな小さい頭を、後の方へ横たへ、小さい短かい頤は、白く輝やいてゐた。部屋の隅から反射する、閉ぢ込められた柔らかな光線の中に寝てゐる彼の顔を見ると、愚鈍な眼をした表情が見えないので、晝間見るほどの忌はしさはなかつた。けれども、死ぬほどの努力をして、重い役割を務めた役者のやうな疲勞が、その表情の中にあつた。そして其の大きな堅く鎖した口元には、酸つぱい悲哀の影がほの見えるてゐた。

彼の身體には、丁度二つの靈魂があつて、一方が眠つてゐる間に、他の凡てのことを知り、且つ悲哀に充ちてゐる。もう一方は、醒めてゐるかの



やうに思はれた。

パーテル・ワツシリーは静かに起き上り、その莊重な表情の無い顔で、ナストヤの方は振り向きもせず、部屋へ歸つて來た。

彼は深い物想ひに沈む人のやうな、重々しい步調で静かに落着いて歩いた。

暗闇は彼を避けた。それは長い影を引いて、彼の後に蹤いて來た。そしてやがてそれは彼の踵の陰に潜んだ。

彼の顔は白く鮮やかに、洋燈の光に照らされて輝いてゐた。

眼は眞直に前方へ向け、深淵のやうに口を開いてゐる部屋の奥の方を凝乎を見詰めてゐた。

彼は静かに重々しげに足を運んだ。

夜は更け渡つて、二番雞がすでに鳴いてゐた。

(六)

大斷食の時期が近づいて來た。

陰鬱な教會の鐘の音は、單調に響いてゐた。その沈んだ、躊躇たためらひつゝ、呼ぶやうな響は、吹雪に被はれた荒野の上に横はつてゐる冬の沈黙を破ることは出来なかつた。怖おそけつゝ、鐘樓から戰慄ふるへ出て、黯澹あんたんとした空氣に充ちた密林の中に漂ひ、そしてやがて地上に落ちて消えていつた。その微かに、だが執拗に人に迫つて來るやうに呼び立つる小さい教會へは、暫し誰も來る者は無かつた。

第一週の終り頃になつて、漸々二人の老婆が來た。荒れ果てた冬の寂寥さびさを思はせるやうなその老婆は、目も當あてられぬほど老耄おいほれて、聾つんばな



上に、齒のぬけた口を、もぐく動かしながら、覺束おぼつかなげに話した。

彼の女は始めも終りも無い不得要領なお祈りを、續けざまに繰り返してゐた。そして彼の女の涙や言葉が、恰も永い間の苦役に歳老いて、安らかな休息を要求もとめるかのやうであつた。

もう罪の赦しが出たのに拘らず、彼の女等は猶祈り續けてゐた。——  
苦しい夢の断片のやうな臃げな祈りを——。

後から一團の人々が來た、彼等の若やいだ熱烈な言葉や涙が鋭どく閃いて、バーテル・ワツシリ一の靈魂を射たのであつた。

農夫のシモン・モスヤギンが、三度も床の上まで腰屈かんで、慇懃いんきんに牧師に近づいて行つた時、牧師は斯うした場合に不似合な態度で、首を衝き出し、腕を胸の上に組み、そして一方の手で髯を撫でながら、鋭い注意を集めたのであつた。

モスヤギンは牧師の傍近く寄つたが、牧師の異様な容姿に吃驚びつくりした。牧師は彼を見ながら微笑した。彼の小鼻は、馬のそののやうに膨はくらんでゐた。

「私はお前さんが何うかしたのかと思つてゐた」

牧師は笑を浮べながら彼に言つた。「今日は何にしに來たんだね、モスヤギン?」

「懺悔しに來ました」

モスヤギンは口早に答へた。そして彼は愛想好よく、一本の糸で繫つないだやうに齒並の揃つた白い齒を見せた。

「懺悔すると氣が軽くなるかね」

牧師は斯う問ひながら笑ひ出した。彼はさも悦しさうに見えた。そして彼も調子を合はしたやうな笑ひ方をした。



「勿論軽くなりますだ」

「お前さんは羊も馬も皆賣り飛ばして、車を質に入れたと言ふのは事實かね？」

モスヤギンは馬鹿に眞面目になつて、牧師を見詰めてゐた。彼の顔には表情は無かつた。そして瞳は下を向いてゐた。

二人は沈黙した。

やがてバーテル・ワツシリーは靜かに懺悔の椅子の方へ近づいてそして言つた。

「さあお前さんの罪を懺悔なさい」

モスヤギンは咳をした。彼は生眞面目な顔で坐りながら、丁寧に上半身と頭とを前方に突き出して、除々と語り始めた。

彼の語つてゐる間に、牧師の顔は漸次犯し難い莊嚴さに變つていつた。

彼は丁度、農夫の別扱るやうな不吉な言葉の霰の中に、硬くなつたかのやうに見えた。

彼は深い愁息を漏した。

無意義なモスヤギンの一生の馬鹿げ切つた不甲斐無い身の上話に窒息させられて、それが見えざる蛇の黒いとぐろのやうに、彼を巻き付けてゐるかのやうに思はれた。

因果律の鐵則も、斯うした單純な不可思議な生命の上には、その威力を失つて、幻想的な意外な矛盾が、小さい罪と大きい罪とで繋がれ、その硬い原始的な意志とそして盛んな創造力と煩悶とが、何處か生命と死との境界で、接し合つてゐるやうにも思はれた。

彼の理性は明瞭で且つアイロニカルであつた。そして彼は森林中の野獸のやうに壯健で、胸には三つの心臓が悸動してゐて、その一つは堪へ



難い苦惱の裡に死滅し、他の二つは彼に新生命を與へてゐるかのやうに見えた。そして彼には、自分の足が確固しつこと立つてゐるから、大地すらも足踏で衝き倒すことが出来るやうに思はれたのであつた。  
事實は斯うである。

彼は常に飢ゑてゐた。そして彼の妻も子供も家畜も同様に飢ゑてゐた。彼の掻き亂された理性は、恰かも醉漢のやうにあちこち彷徨さまよつて、自分自身の眞實ほんたうの戸口を見出すことが出来なかつた。

彼は殆んど絶望的狀態で、渾身こんしんの力を集め、何物かを築き上げ、そして何事かを爲さんとして強く大地を踏んだが、凡てが破壊し倒れて、ただ粗荒な侮蔑と嘲笑とが反響するばかりであつた。

彼は孤兒みなしごを引取つて、自分一人の力で養つてやつたほど同情心の深い男であつた。

然し孤兒は間も無く飢と病苦とのために死んでいつた。

彼はそれ以來自分自身を嘲笑しはじめた。そして人間は同情の心を持つ可きであるかどうかと言ふやうな事には、少しも留意しなくなつた。斯ふした人の眼には、涙の乾く隙も無く、常に憤懣と反抗の叫びがその唇を去らないものであるが、而も彼は何時も快活に戯談を言つてゐた。そしてその度に、彼の可笑おかしな赤髯は、不思議な舞踏でもやつてゐるかのやうに、皆撚ひねり上るのであつた。

彼はまた若者や娘達と同じやうに、リンゲンダンスをもやつた。彼は悲しげな調しよべの歌を唄つた。ある者はそれを聞いて泣いた。然し彼はたゞ輕やかな氣分で、嘲弄するやうに微笑んでゐた。

彼の罪と言ふのは、極く些細な、一時の形式的な過失であつた。

それは、彼が或る時、一人の幾何學者と聖彼得堡まで乗り合せた折り



に、彼から一片の肉入の麵麩を貰つて食つたのであつた。彼はその一寸した禮儀に恃そむいたことを、まるで人殺しでもやつたかのやうに人々に語つた。それからまた、昔し聖餐式の前に煙草を喫んだことを、くどくしく語り立てた。それは聞いてゐる方が却つて苦痛だつた。

『もう濟みました』

モスヤギンは嬉しさうに變つた調子で言つた。そして彼は靜かに額の汗を拭いた。

バーテル・ワツシリーは低垂うなだれてゐた首を彼の方へ向けた。

『そして誰がお前さんを扶たす助けてゐるんだね？』

『誰が私を扶たす助けてるかてんですかね！』

モスヤギンは同じ言葉を繰り返した。「いゝや、誰も私を扶たす助けて呉れる者ありませんねえだ。貴方も御存知の通り、村の人達は皆んな暮くらしして居るつてゐるんだね。たゞあのイワン・ポルフイリツチさんが私を扶たす助けて呉れたことありました』

彼は輝く瞳を凝乎と牧師に向けてゐた。

『あの人は三ポンドほど粉を呉れましたが、秋になると四ポンドほどにして返さなくちやなりませぬえだ』

『そして神様には？』

モスヤギンは深い愁息なげいきを漏した。そして彼の顔は悲しさうであつた。

『神様？ 神様には私何も御奉公して居りませぬえだ』

牧師の限り無い追究は、モスヤギンを退屈にした。

彼は牧師の肩越しに、空虚な教會の内部を窺つて見たり、牧師の疎まはらになつた髯を數へたりした。そして牧師の汚れた黒い齒に眼をつけて、『砂糖分が多過ぎるんだ』などと思つたりした。彼は遂に愁息した。



「お前さんはそれで何が望みかね？」

「何が望みかてんですか？ 何を望んだら善うがせうかね？」  
彼は再び沈黙した。

教會の中は、漸次暗く寒くなつて來た。そしてそれは農夫の下着の中に犇々と沁み込んでいつた。

「これから以後もそのまゝで好いと思つてるのかね？」

彼の言葉は遠く陰慘に、丁度土塊が墓窟の中の棺の上に落ちた時のやうに響いた。

「これからだつて同じことでがせう、同じことで！」

農夫は繰り返した。そして自分自身の言葉を聞いた。

彼は今までの自分の生涯を、凡て眼の前に思ひ浮べて見た。飢ゑに瘦せこけた子供の顔、嘲笑、堪へ難い労働、そして心の底から涌き起つて來

る鬱悶の暗の壓迫に堪へ兼ねて、遂に火酒を呻つて喚いたり、喧嘩を買つたりした自分の憐れな姿を……。

彼には之が彼の死の日の來るまで續くやうに思はれてならなかつた。

彼は白い睫毛をちよい／＼瞬かせながら、涙に濕んだ眼で牧師を見上げた。

鋭い輝く眼とはたと出逢つた。

彼等はお互に似寄つた恐ろしい悲哀を、お互の裡に見え出した。そして二人は近寄つたのであつた。

パーテル・ワツシリーは農夫の肩に手をかけた。それは秋の蜘蛛の巢のやうに、軽く柔かに置かれたのであつた。

優しみに充ちた微かな震ひが、モスヤギンの肩を動かした。彼は痛ましげに眼を上げて、訴ふるやうに笑ひながら、半ば口を開いて言つた。



『多分これからは幾等かよくなりませう』

牧師は軽く手を放して沈黙した。

彼の白い睫毛は激しく動いた。そして彼の赤髯は、まるで踊つてゐるかのやうに愉快げに見えた。舌は何を言つてるのか分らないほどに吃つてゐた。

『然うですが、これからは幾等かちやなくつて、づつとよくなりますべえ』

『さうだ、お前さんは眞實のことを言つた』

牧師は彼にお了<sup>しよ</sup>ひまで言はせないで、足で床をとんと踏み鳴らした。そして激しい憤りに燃え立つやうな眼で凝乎と農夫を見詰め、怒つた尾鳴蛇<sup>こりへび</sup>のやうに舌鼓を打つた。

『泣きなさんな。お前さんも泣くことを知つてるんだね。もつと仔牛の

やうに吠えなさい。さうした處で私には何うならう？』

彼は指先で自分の胸を衝いた。

『私に何が出來よう、私は神様？ 祈んなさい、祈んなさい。私はそれを勧める』

斯ふ言つて彼は一寸農夫を衝いた。

『跪きなさい！』

モスヤギンは跪いた。

『祈んなさい！』

後方から空虚な暗闇な教會が、押し迫つて來るやうに見えた。頭上でまた牧師が叫んだ。

『祈んなさい、祈んなさい！』

モスヤギンは夢中になつて胸に十字を切つた。そして幾度となく床の



上に頭をすりつけた。彼はひどく感動したかのやうに、やたらに頭を振つた。そして彼はその瞬間に、一つのある強い謎のやうな意志に従ふのだと言ふ自覺のために戦慄した。

彼の氣分は妙に透澄になつて、偉大な莊重な本體に對する恐怖の念は、同時にその守りと慈悲とを希求する心に變つていつた。

彼は牧師が「もうよろしい」と言ふまで、沈黙のまゝ焦しげに額を冷たい床板の上にすりつけてゐた。

モスヤギンは立ち上つて、諸々の聖像に向つて、胸に十字を切つた。

そして牧師に近寄つた時、彼の例の赤髯が滑稽に動いた。彼は今心から、今後は善くなるだらうと信じ、安心して牧師の命を俟つてゐた。

牧師はたゞ莊嚴な好奇的な眼つきをして、彼を見詰めながら罪の赦しを與へた。

モスヤギンは歸りがけに、後を振り向いて見た。牧師の淋しげな影像が、同じ場處にしよんぼりと動いてゐた。

蠟燭の微かな光は、一瞬の間も靜止することはなかつた。一定の境界も輪郭もなく、たゞ教會の中に充滿してゐる暗闇の一部を、ぼんやりと照し出してゐた。

毎日懺悔する者が來て、バーテル・ワツシリーの眼の前には、殆んど聞き取れないやうな繰言や、若々しい顔やが入り代り立ち代りした。彼は何時も同じ嚴肅な聲で、追究するやうに問ひかけた。そしてその間、躊躇うやうな、混亂した言葉が、牧師の耳朵を打つた。その裡には苦痛と恐怖と大いなる期待とが潜んでゐた。

凡ての人々が此の人生を呪詛してゐる。

然し誰も死を欲してゐる者は無い。



人々は昂奮し激情に燃え、そして何物かを希求してゐる。そして其の希求には始めと言ふものが無い。人類の存在と共にあるのであつて、此の世界から已に死に去つた者、また今猶生きてゐるもの、それ等の凡らゆる頭脳と心をつらぬいてゐる。そしてそれは恰かも競賣に附したかのやうに、漸次と激しくなつて來た。

満たされない心の悲哀や、欺かれた信仰の苦惱や、限り無い寂寥の渴望やを呼吸して、より一層鋭どくなつて來た。

死せる者も生ける者も、凡らゆる人類の心の汁液が、それを養ひ育くんだ一大喬木のやうに、その枝葉を人生の上に擴げた。

ワツシリーは無際限の森林の中の漂浪者のやうに、此の凡らゆる靈魂の中に、自今の正しい路を見失つたのであつた。彼は自分の體驗し來つた處の物、莊重な悲哀を以て、彼の頭を裝飾つてあつた物の凡てを見失

つて、今更に何物かを希求し始めた。堪へ難い焦燥と苛立たしさとを持つて……。

今彼は敢て人間の涙を見ようとは思つてゐない。而も彼の涙は止め度も無く涌き出てゐた。そしてその涙の一滴は、彼に對する一つの命令であつた。それは恰かも毒矢のやうに、彼の心の中に突き當つた。斯くて彼に押し迫つて來る恐怖の理で、彼は臆げに、自分は全人類の救主でもなく、また彼等の隣人でもなく、却つて彼の従僕であり奴隸であることを悟覺つたのであつた。

偉大な希望に輝く瞳は彼を要求め、彼に命令し、彼を呼んだ。

彼は屢々激しい怒りの心を抑へながら言つた。

「神様！　願ひします、神様！」

彼は靜かに踵をかへした。



夜間は、生ける人類の幽霊のやうな影となつた。彼はそれと共に隊を組んで、音も無く歩み、そして瞑想に沈んだ。

彼には彼の家の壁が透通つて見え、錠前で戸締りすることなどは愚かなことのやうに思はれて來た。

斷食祭の第五週目に、柔かい春風が野面を吹き渡り、それがやがて綠色の霞となつて立ちこめるやうになつた。その時牧師の妻はまた飲酒癖に犯されてゐた。

彼の女は四日間も飲み續けた。そして苦痛に堪へないやうな叫び聲を上げて轉り廻つた。そして五日目の土曜日に、自分の部屋の洋燈を消して、はんげちで縊れ死なうとした。けれども其れが咽喉を絞め始めると、驚いて叫び出してしまつた。

戸が幸ひ開いてゐたので、牧師と娘のナスタヤとが走つて來て、其れを切つてやつた。

その事は一寸した驚愕で治まつた。それは、始めから氣に留める必要も無いほどの細い紐であつて、縊死などの出来るやうなものではなかつた。

彼の女は自分でひどく驚いて、泣きながら罪を謝した。手足は震へ、頭は左右に搖れた。彼の女は、夜中牧師を自分の傍から離さなかつた。そして少しでも彼の傍へ近寄らうとしてゐた。

牧師は妻の言ふまゝに、消された洋燈に再び火を灯し、それから諸聖像の前にも燈を灯した。それは丁度大祝祭の前夜のやうであつた。

騒動が濟んだのでバーテル・ワツシリーは安心して、優しく打解けて妻に話した。



彼は戯談を言つたり、神學校時代に、最も面白かつたことなどを話して聞かせた。そして少年時代に一度他の子供等と共に、林檎を盗んだ事なども話して聞かした。然し彼は、其處の番人に捉まつたことまでを話すには、あまりに心苦しかつた。

でもナストヤは、始めつから其處ことを信じてゐなかつた。そして笑ひもしなかつた。たゞパーテル・ワツシリーは子供のやうに微笑んでゐた。彼の顔は端正で、人善さうに見えた。牧師の妻は漸次落着いて來た。そして暗い隅の方を、ちよいと覗くことを止した。

間もなくナストヤが寢入つてから、彼の女は陰鬱な微かな笑みを浮べながら彼に問うた。

「吃驚して？」

パーテル・ワツシリーの顔は一寸陰険（クダカシ）になつたが、唇でだけ笑ひな

がら言つた。

「ほんとに驚いて了つた。一體何のつもりであんなまねをするんだ？」

牧師の妻は突然風に吹き上げられたかのやうに後退りして、はんげちの總（トサ）を震へる指で搔き分けながら言つた。

「ワスヤ、私何にも知らないの。たゞむやみに悲しくなつたの。そして色んな恐ろしいことが起つて來るのだけど、私には寸毫（センチ）もわけが分らないわ。春が來たかと思うと直ぐ夏になつて、また秋が來て、それから冬になる、それだのにお前は何時までも今のやうにその隅に坐つて、私は此處の隅に坐つてゐるんだわ。ワスヤ氣を悪くしちや嫌や。私は變へようはないと思つてはゐるんだけど……」

彼の女は愁息（ためいき）を吐いた。そしてはんげちを眼から離さずに話し續けた。  
「以前は死ぬことなんか何でもなかつたわ。そして私始終（しよつちう）死んで了ふの



か知らと思つてゐたの。だけど今はもう死ぬのが怖くなつたわ。私何うしたらいいのかわらぬ？ あゝまた飲むより外に……」

彼の女は恃り無さうな悲しみに充ちた眼を牧師の方へ向けた。その瞳の裡には、死の悲哀と、限り無い絶望と、陰惨な、だがつゝましやかな慈悲の嘆願とがあつた。

彼は一度此の市のファイエースキーの畫堂で、汚れない韃鞨人が、馬を屠殺者のところへ引つ張つて行く繪を見たことがあつた。

馬の蹄が一つとれて揺れ動くので、馬は柔らかな蹠で石の上を歩かねばならない。天氣は冷たく、白い霧が雲のやうに馬を包んでゐる。汗みどろの皮膚は日に輝き、眼は真直に前方へ向けてゐる。その柔和さうに見える眼の中には、ある恐ろしさが閃いてゐた。

彼の妻は今丁度さうした眼をしてゐるのであつた。若し誰か墓穴を掘

り、その手で彼の女を穴の中へ投げ込んで、生き埋めにしてやる者があつたら、その人は善行をしたのだ、と彼は思つた。

牧師の妻は震へる唇で、前に消えた煙草を、新らたに吸ひつけようとして苛立つてゐた。そしてまた話し出した。

「そしてあの兒、……誰のことを言つてるか解るわねえ。あの兒も可哀想だけど、いまに歩き出したら私を死ぬほど苦しめるんでせう。そして私助かりつこないわ。だから私今お前に言つてるの。何うしたら好いだらうねワスヤ？ 私には寸毫も解らないわ」

彼の女は愁息した。そして輕やかに手を打つた。低く押しつけられたやうな部屋も、彼の女と共に愁息してゐるかのやうに見えた。夜闇の影は群をなしてバーナル・ワツシリーを圍繞した。そして彼は悲痛に悶掻き始めた。彼は激しく愁息し、力無げに手を伸ばして慈悲と恵みとをそし



て眞理とを乞うた。

「あゝー」

牧師の骨張つた胸の裡から、深い愁息が漏れた。

彼は飛び上つて、激しい勢で椅子を突倒し、組んだ腕を揺り動かして、室内をあちこち歩き廻つた。彼は泣きながら、盲目か狂人かのやうに椅子にでも壁にでもやたらに衝き當つた。

彼は壁に衝き當ると、骨張つた指を差し伸ばして、恐ろしげにそれを押した。そしてまた前の方へ歩いて行つた。斯うして彼は、氣味の悪い異様な姿をした幻影のやうに、壁の間の低い獄舎の中を歩きまはつた。彼の身體は、荒々しげに動いてゐるに拘らず、彼の瞳は、盲目のやうに動かなかつた。そしてワスヤの死んだ後、始めて熱い涙が滲み出たのであつた。

「何うしたのワスヤ、何うしたの？」

牧師の妻は靈<sup>き</sup>拔<sup>か</sup>けしたやうに夫を眺めながら叫んだ。

パーテル・ワツシラーは激しく振り向いた。そして物を搗<sup>つ</sup>き碎<sup>くだ</sup>きでもするかやうなひどい勢で、妻の方へ馳せて來た。彼はその重い震へてゐる手を、妻の頭上に置いた。それが恰も彼の女を祝福し不吉を取り去らうとするかのやうに見えたので、彼の女は安心して沈黙してゐた。

「可哀さうにお前……可哀さうにね……」

その言葉の一言一句は、金石の響きを發する涙であつた。

彼は再び子を奪はれた野獸のやうに、絶望的な態度で大股に部屋の中をぐる／＼歩き廻つた。彼の顔は激しく痙攣的に震へた。そしてそのぶる／＼する唇からは、限り無い苦痛に充ちた言葉が吐き出された。

「可哀想だ……可哀想だ。凡てが可哀想だ。凡てが泣いてゐる。そして



誰も扶けて呉れる者は無いのだ。あゝ！」

彼は突然言葉を切つた。そして眼を上げて屋根超しに、春の夜闇を射通すやうに凝乎と見詰めてゐた。彼はまた衝き破るやうな、荒々しい聲で叫び出した。

「さうだ、お前はそれを忍んでゐるんだ！ お前は忍んでゐるんだ。そして……」

彼は堅く握りしめた拳を高く上げた。然し彼の妻は、彼の足元で両手でもつて膝に抱きついて、ヒステリックに悶搔き廻り、笑つたり泣いたりして息を窒らせた。

「いゝえ、もう決して、貴方、私はもうこの上……」

彼の女は吃つた。

白痴兒はそれに目を醒ましてぶつ／＼言つた。ナストヤは驚いて駈けて来た。

て来た。

牧師の顎は鐵のやうに固く噛みしめられてゐた。彼は沈黙して冷靜さを装ひながら、妻を優しくいたはつて床へ連れて行つた。彼の女は寢込んだ時、しつかと彼の手を握つてゐた。牧師はそのまま翌朝まで彼の女の床の傍に坐つてゐた。そして大祝祭の前夜のやうに、聖像の前には夜通し燈が灯されてゐた。

翌日バーテル・ワツシリーは、何時ものやうに冷靜で落ち着いてゐた。そして彼は前夜のことなどは、少しも口にしなかつた。然し妻と話すその言葉、靜かに見上げるその瞳には、しとやかな親切さが溢れてゐた。それはたゞ一人彼の女のみが、訶なまれるやうな思ひをしながら、理解し得るものであつた。

此の沈黙した男性的な親切さは、虐げられた妻の心にも、遂に微笑を



與へた。そしてその微笑の裡には、ある力強い尊とさを感じしむる何物かゝあつた。

彼等はお互にしんみりと話すなどと言ふことはほんとなにない位で、單調な言葉数の少ない日が多かつた。そしてまた二人寄り合つてゐることも稀で、お互に離れ／＼に生活してゐた。

然し彼等が同じ苦痛に充ちた心でゐると言ふことが、彼等の相互の思慕の念を深めたのであつた。

斯うした絶望的悲哀と親切との裡にあつて、彼等は如何に愛し合つたことであらう！

けれども慘虐な運命の魔の影は、誰も之を窺ふことは出来なかつた。白痴兒が生れてから、彼等は永い間、夫たり妻たるの關係を止してゐた。

彼等は幸福に對する希望も無く、夢にすらもそれを實現し得ないやうな、いちらしい不幸な失戀の人のやうに見えた。

然し一度消え失せた羞かみと、美の欲望とが妻の心に再び起つて來た。

牧師は妻の素手などを見ると、顔を赤くするのが常であつた。

彼の女の顔や髪は若々しいしなやかさを現はしたが、その深い悲哀の調子が殊更に美しく見えた。

彼の女は酒が飲みたくなつたとき、丁度恐水病の近寄りつゝあることを知つた犬のやうに、自分の部屋の暗い隅に隠れ込んで、一人黙しながら、妄想とそして内から涌き起つて來る幽霊と闘つてゐた。

夜毎々々、皆が寢靜まつてから、牧師の妻は音を立てないやうに靜かに起き上つて、夫の床の傍へ行き、そして彼の頭の上に十字を切つて、悲哀と惡夢とを拂つてやつた。



彼の女は夫の手に接吻してやらうとしたが、思ひ止つた。そして彼の女は靜かに丁度沼や墓の上に、死人の現はれるかと思はれるやうな蒼白さと悲しさを、その面に湛へながら、暗闇の中を影のやうに歸つて行つた。

(七)

大斷食祭の鐘の音は、絶えず單純に陰慘に鳴り響いて、その一打毎に人々の良心の上に、莊嚴な感じを與へてゐた。その鐘の響きに従つて、四方から色の無い人影が、漸次群をなして集つて來た。

荒野はまだ夜闇の裡にあつた。そして凍てた小川はまだ響きを立てなかつた。

彼處此處の小路には、人影が淋しげに集つて、的<sup>あ</sup>てども無く蠢<sup>うご</sup>めいてゐた。

毎日早朝から夜更けになるまで、バーテル・ワツシリーの眼の前には、人の顔の絶え間がなかつた。此處には蠟燭の黄色な光に照され、彼處の暗い隅からは陰影のやうに現はれて來る。丁度教會の空氣が人間に變つて、慈悲と眞理とを要求<sup>もとめ</sup>てゐるかのやうであつた。

群集は互に無作法に押し合ひ踏み合ひ、此處にも彼處にも異様な容姿で跪き、或は愁息したりして、何等希願するやうにもなく、たゞ執拗に彼等の罪惡と苦痛とを牧師の處に持つて來た。

各々皆それ<sup>ごと</sup>くの苦痛と憂愁とを持つてゐた。それはまるで十人分の生涯にしてもいゝほどの苦痛であつた。

牧師は當惑した。全世界の人々が、彼等の涙と苦惱とを持つて來て、彼



の救ひを待ちあぐんでゐるかのやうに思はれた。

ある者は温順おとなしく待つてゐた。そしてある者は命令的な態度で待つてゐた。

彼は嘗ては人生の眞實を探ね求めたが、今は却つてそのために窒息しようとしてゐる。——苦痛と言ふ無慈悲な眞實のために……。

彼は自分の力無さを自覺して、世界の果てへ逃れて行つて死んで了ひたいと思つた。それは見ると言ふことも、聞くと言ふことも、そして知ると言ふこともしたくないためであつた。

彼は人類の苦痛を呼んだ。そして苦痛は來た。犠牲の祭壇のやうに彼の靈魂は燃えた。

彼は後から來る者を、兄弟のやうに腕に抱いて、「憐れなる友よ、來れ！ 我等は共に戦ひ、共に泣き、共に探さう。何處にも人類の救ひは

見え出されないから……」

斯う言つてやりたかつた。

けれども一生涯苦痛の裡に生活して來た人々は、斯うしたことを彼に期待しようとは思はなかつた。

彼は憤懣と焦燥と失望との裡に、常に繰り返して言つた。

「神様にお願ひなさい！ 神様に！」

彼等は悲しさうな様子で、彼を信じて行つた。

憐れな人類の新らしい群衆は、贖罪のために後から／＼やつて來た。

然し彼は狂氣したやうに、恐ろしい無慈悲な言葉を繰り返した。

「神様にお願ひなさい！ 神様に！」

彼には、人々の眞實を告げるのを聞いてゐる時間が、まるで數年間のやうに永く思はれた。そして懺悔前にあつた朝のこと等は、ぼんやりとし



てはるか遠い昔のことのやうに思はれた。

彼が最後に教會を出た時、<sup>あたり</sup>周邊はもう黄昏れて、空に瞬く星は平和に充ちて輝やいてゐた。そして春の夜の静かな風は、媚びるやうに吹いていつた。然し彼は星の平和を信ずることが出来なかつた。あの遠い世界から、愁息と叫喚と、陰惨な慈悲の愁訴とが、此の世界に押し迫つて來るかのやうに思はれてならなかつた。彼は此の世に凡らゆる罪惡を行ひ、凡らゆる涙を絞り、凡らゆる人間の心を苦しめ、そして片々に引き裂いたかのやうな、一種の恥辱を感じたのであつた。

彼は立ち竝ぶ家の傍を通り過ぎる時、半獸半童の恐ろしい影像が、こゝとも無げにその狂的な魔の威力を揮つてゐる我が家へ這入る時、云ひ知れぬ恥辱を感じた。

彼は朝なく、恥辱と戦慄とに充たされた刑場へ行く人のやうに、教

會へ行つた。彼には凡らゆる人が刑吏のやうに見えるのであつた。濃やかな情愛も感覺も無い天、騒々しく無意味に笑ふ群衆、そして冷酷な自分の思想、それを思ふと彼は堪らなかつた。

惱める凡ての人が、彼に取つては刑吏であり、また無能なる神の力無き従僕なのであつた。そして親しい懐しげな眼は、彼を訶なむ鞭となるのであつた。

人々は皆恐ろしく眞面目で、牧師を嘲笑する者など一人も無かつた。

然し彼は一瞬の間も、惡魔のやうな嘲笑者の聲を聞くことを恐れた。そして彼自身も亦人に背を見せることを恐れた。人の背には、凡らゆる惡と戦慄すべき何物か、潜んでゐるかのやうに、彼には思はれたのであつた。

彼が凝乎と何物かを見詰めてゐる間は、誰も近寄つて來るものは無か



つた。彼は重々しげな眼で一寸見渡し、それから時々イワン長老の立つてゐる教壇の後の方を窺ふのであつた。

教會で聲高に話すのは彼のみであつた。彼は蠟燭を持つて、靜かに祭事を行ひ、そして定時には、教會の從僕と二人の少年とを廻らせて集金した。彼はがぢや／＼鳴る銅貨を勘定し、それを積み重ねて度々錠で弾いて見た。

人々が跪く時、彼はたゞ頭だけを垂れて、十字を切つた。彼は自ら神に愛せられ、神の御用に立つ者で、若し彼がゐなかつたら、萬事このやうに順調に秩序正しく行ふことは、神様ですら困難であると自信してゐるものゝやうに、皆には見えるのであつた。

斷食祭が始まつてから可成り永い間牧師には、彼が長い懺悔を行ふことを怒つてゐる人々が、斯くも長い時間を要するほどの罪惡を、何うし

て犯したのか、理解出来なかつた。彼はそれを自分が、斯かる多人數の人々を取り扱つて行くことが、拙劣であるためだとも思つた。

『皆んな物事が解つてると思つてゐるんですね』

彼は柔らかな副牧師に斯う云つた。

副牧師も彼と同じく、此の大祭期の重要な役目を割當てられてゐたので、すつかり疲れ切つてゐた。

『思慮の無い皆の人々から、笑ひものにされるんだ』

パーテル・ワツシリーの莊重さは、すらつとした彼の體格と共に、副牧師の氣に入つてゐた。副牧師には、眞面目な彼が、恰かも嚴格な正直な出納吏が、精密な計算を要求して自分の前に立つてゐるかのやうにすら思はれたのであつた。

イワン・ボルフィリツチは最後の週の斷食と教會の禮拜とを濟まし、そ



してやがて懺悔した。

彼は極く小さい罪を心に浮べながら、質問に答へる用意をした。彼は何時ものやうに高慢で、その罪の懺悔はたゞ形式的に過ぎなかつた。

カール週の水曜日パーテル・ワッシリが自分でも疲労を感じ始めた時、特に多くの懺悔者が來た。その最後に零落した農夫のトリフオンがやつて來た。彼は塞で、此のツナーメンスコエの近邊の村々を、義足を着けてうろつきまはつてゐた。彼はずつと以前工場で働いてゐる時、脚を碎かれて附根から切斷しなければならなかつた。そして脚の代りに革張りの短かい斷片を着けてゐた。その義足の上に高く聳やかした肩の、落ち込んだ間に、汚らしい麻屑が生えたやうな頭がのつかつてゐた。鬚は汚ならしくぼう／＼と生え、乞食の飲酒漢と窃盜らしい凄い眼をきよろつかせてゐた。彼は野獸のやうに嫌らしく不潔で、爬虫のやうに街

路の汚物や塵埃の中を轉がり歩いてゐた。野獸の靈魂がぼんやりした謎のやうなものである如く、彼に靈魂があるか否か甚だ疑問であつた。そしてまた彼は何うして生活し、何のために生きてゐるのか、ほんとに理解し難いことであつた。而も彼は現在生活してゐるのだ。……飲んだり喧嘩したり、そして人間に似た異様な姿をした女を妻にして……。

牧師は低く腰を屈めて、彼の懺悔を聞かねばならなかつた。彼は惡臭を發する身體を被ひ隠さうともしない。彼の頭や頸には、恰かも彼が地上を匍匐するやうに、毒虫が爬ひ廻つてゐた。

牧師はその目も當てられぬ不幸な生物を見るのが恐ろしかつた。それに彼にはひどく人間らしい氣分が消え失せてゐた。それは丁度王が彼の宮殿に居る時か、或は聖人が彼の部屋に居る時のやうに、ひどく不正直になつてゐると思つた。



「行け！ 神様はお前の罪を赦して下さるだらう」  
牧師は云つた。

「一寸待つて下さい。まだ少し申し上げたいことがありますから」  
乞食は判然と云つた。そして彼は赤銅色になつた顔を上げて語り出した。彼は一年前、森の中で、まだ年の行かない娘を手ごめにしたことがあつたけれども、その女の子が泣くので三哥ヨベツやつた。然し彼はその金に氣にかゝつてならないので、つい娘を絞め殺して埋めた。けれども誰もまだそれに氣付かないのだと云つた。

彼は此の話しを十度ほど十人の異つた牧師に話した。そして彼はそれをあまりに度々繰返すので、自分自身には何等の關係のない、單純なお伽噺のやうに思つてゐた。それは話す度毎に色々變つて來た。夏が秋になつたり、ブロンドの髪の娘が黒い髪の娘になつたりした。然し三哥だ

けは何時にも變らなかつた。

人々は此の話しを信じないでたゞ笑つてゐた。十年以前にも、そしてその以後にも、娘が失はれたことはなかつた。

此の恐ろしい話しは、彼が酔つぱらつて、森の中を轉げ廻つてゐる間に、考へ出した空想であらうと云つて、てんで合手にしなかつた。彼は遂に怒り出した。彼は神と悪魔とを同時に呼びながら叫んで誓つた。そして不快な汚たない話しを語り始めたので、老年の牧師は赤くなつて怒つた。彼は今ツナーメンスコエの牧師が此の話しを信ずるか何うかと待つてゐた。

彼は信じて呉れたので満足した。

牧師は蒼くなつて後退りした。そして彼を打たんとするかのやうに手を擧げて、



「それは本當か？」

濕り聲で問うた。

乞食は頭を舉げて十字を切つた。

「神かけて事實ほんたうで御座いますだ。大地は直ぐに私を噛みますべえ」

「地獄は地上にあるんだ」

牧師は叫んだ。

「お前は地獄を知つてるか？」

「神様は御慈悲な方がす」

乞食は陰鬱な聲で病人のやうに吃つた。

彼の凄い驚嘆したやうな眼を見ると、彼は一方に自分で地獄を待ちながら、娘を絞め殺したことを懺悔することに依つて、地獄と和解するかのやうに見えた。

「地上にも地獄、天にも地獄、何處に天國はあるんだ？ お前が若し虫

だつたら、私は踏み殺してやるんだが。それでもお前は人間だらう？

人間か？ それとも虫か？ お前は一體何だ？」

牧師は叫んだ。髪は風に吹かれたやうに揺らいだ。

「お前の神は何處に居るんだ？ 何故彼はお前を見捨てたのだ？」

「神様は本當に見捨てなすつた」

乞食は喜こんでゐた。彼は牧師の言葉を、恰かも熱い湯の中にあるやうな氣持で聞いた。牧師は屈んだ。彼は斯うした卑しい常に無い態度を取ると、ある苦痛に充ちた異様な誇りを感じたのであつた。そして彼は情に激したやうに私語いた。

「聞け！ 恐るゝことはない。お前は地獄へは行かない。私の云ふことは眞實ほんたうだ。私は自分で人間を殺した。而もたゞ一人の娘で、ナストヤと



云ふんだ。お前は地獄へは行かない。天國へ行く。解つたか？ 聖人や義人と共に、而もお前は凡ての人よりも上だ。凡ての人よりも……」

その夜パーテル・ワツシリーは遅くなつて歸宅した。

已に夕餐は済んでゐた。彼は非常に疲れて蒼くなり、道を外れて長いこと露に濡れた野原を逍遙つてでも來たかのやうに、膝の上まで濡れそぼつてゐた。

家ではオステル祭の準備が出来てゐた。妻は忙しげにしてゐたが、ちよい／＼庖厨から出て來て、不安さうに夫の顔を見詰めた。彼の女は努めて愉快さを装つて、自分の不安さを隠さうとしてゐた。

夜になると彼の女は何時ものやうに、爪先立ちになつて靜かに夫の床の傍へ行き、三度夫の頭上に十字を切つて、また靜かに引返さうと思つた時、微かな恐ろしい聲が彼の女を立止まらせた。それはパーテル・ワツ

シリーの莊重な聲に似つかはぬものであつた。

「ナストヤ！ 私はもう教會へは行くまへ」

その聲の裡には、恐怖と子供らしい愁訴とがあつた。恰かも人々が常に粉飾された偽善的な言葉の裡に、誇らしげに自分の感情を隠さうとするやうな、其必要が最早無くなつたほど、不幸が押し寄せて來たかのやうに思はれた。

妻は夫の床の前に跪き、夫の顔を窺き込んだ。ほの暗い洋燈の青い光を受けて、彼は死人のやうに蒼白く、身動きもしなかつた。たゞ黒い瞳ばかりが妻の方へ向けられてゐた。そして彼は重い病人か、或は悪夢に壓された子供のやうに、仰臥して動かれぬものと思つてるものゝやうにも見えた。

「祈んなさい、ワスヤ！」



彼の女は斯う私語いて、冷たい死人のやうな、胸の上に組んだ手を撫でた。

「私には出来ない。何だか恐ろしい。燈を灯して呉れナストヤ」

妻が燈を點けてゐる間に、バーテル・ワツシリーは永い間床に就いてゐた重病人のやうに、靜かに覺束なげに起き上つて、着物を着け始めた。彼は自分で黒衣の鈕をかけることが出来なかつた。

「かけて呉れ」

彼は妻に頼んだ。

「何處へ行かうと云ふの？」

妻は驚いたやうにして尋ねた。

「何處へも行きやしないよ。たゞ……」

彼は室内を靜かに歩き廻り始めた。挫かれたやうな足の、歩調は覺束

なげであつた。頭の揺れるのは、殆んど分らない位だつたが、絶えずぶる／＼震へてゐた。

彼の下顎は力無げに垂れ下つてゐた。彼は懶さうに乾いた熱い唇を舐めながら、顎を閉ぢやうとした。然しそれは直ぐにまた下つた。それで彼の口は開かれたまゝになつてゐた。そして無限の空虚、無限の沈黙のやうな、或る異様な恐ろしいものが、そこに吸ひ附けられてゐるやうに思はれた。此の家の壁の彼方には、もう大地も無く人も無くまた世界も無い。たゞ恐ろしい深淵と永久の沈黙とがあるのみである。

「ワスヤそれはほんど？」

驚きのために半ば正氣を失つて妻は問うた。バーテル・ワツシリーは沈んだ輝きの無い眼で彼の女を見、一瞬の聞元氣を出して、急に手を振り始めた。



「いゝや、いゝや、黙つて……」

彼は再び歩き始めた。顎はまた力無げに下へ垂れた。彼は永劫より永劫に流るゝ時のやうに、静かにくゞ歩き廻つた。

妻、その間、床の上に心配し切つて、半ば死人のやうな蒼白い顔をして坐つてゐた。そして彼の女の眼は静かに動いてゐた。――

異様な何物か、近寄りつゝあつた。何か斯う虚空のやうな 永久の沈黙の如く恐ろしいものが、彼の女の眼前に立つて、凡らゆるものを把握しようとするかのやうな、鋭い眼で彼の女を凝視してゐた。

パーテル・ワツシリーは妻の前に凝乎と立止まり、ぼんやりと彼の女を見やりながら、何か呟いた。

「彼は死ぬんだ！」

妻はさう思つた。そして震へる手で、燐寸を度々取り落しながら、蠟燭

を灯した。

「もつと明かるくして呉れ」

彼は更に頼んだ。

妻は漸次と澤山の燈を灯した。小さい青い一つの星のやうな豆洋燈は、此の生々した光のために、その影を失つて了つた。それは丁度大祝祭が始まつたかのやうであつた。

彼は静かに微かに、永劫の時のやうに、此の光明に充溢した空間の中を動いてゐた。今彼は明かるい空間を見るやうにして妻を見やつた。そして短い恐ろしい一瞬の間、彼は強い孤獨の感に打たれたのであつた。それは彼の女にもまた他人にも、變へることは出来ない様に思はれた。假令全世界の善良な力強い人々が集つて来て、彼を抱擁し愛撫しても、彼は猶孤獨を感じたであらう。



「彼は死ぬのだ！」

再び斯う考へた時、悚然とするやうな悪寒が彼の女を襲うた。斯うして夜は過ぎた。

黎明あけがた近くなるにつれてバーテル・ワツシリーの歩調は、次第に確りして來た。

彼は眼を止げて、一寸妻を見ながら言つた。

「なせ此處に澤山の燈を灯けたのです？ 消しなさい」

妻は洋燈や蠟燭を吹き消して、そして怯々おそくしながら言つた。

「ワスヤ！」

「明日話さう。お前は部屋へお歸り。もう寐る時刻だ」

然し妻は行かなかつた。そして何やら眼で嘆願してゐるやうに見えた。彼は前のやうに體軀からだを堅く真直ぐに伸して、妻の傍へ行つた。そして

子供にでもするかやうに頭を撫でてやつた。

「もうお休みなさい、奥さん」

彼は斯う言つて笑つた。

彼の顔は蒼ざめて、死んだ幽靈のやうであつた。そしてその眼縁には、黒い輪が附いてゐた。それは恰も夜闇が、其處へ巢喰うて、立ち去らうともしないやうに見えた。

翌朝バーテル・ワツシリーは妻に凡てを打ち明けて話した。

彼は職を辭して、秋になつて金が集つたら、旅立たうとしてゐるのであつた。然し何處へ行くかと言ふことは、まだ判然と決めては置かなかつた。たゞ白痴兒は此處へ殘して、里子にでもやらうと考へてゐた。

妻は微笑んだり、泣いたりした。そして赤く熱した唇を夫に當て、接吻した。それは白痴兒が生れてから始めての接吻であつた。



此の時パーテル・ワツシリーは四十歳で、彼の妻は三十四歳であつた。

(八)

三ヶ月の間、彼等の靈たましひは穩やかであつた。そして一度失はれた希望と歡喜とが、また新らたに彼等の家庭に歸つて來た。

牧師の妻は、今日まで色々の苦痛を堪へ忍んで來たその全精力を以て、新しい生涯——まだ嘗て何人も經驗したことの無い、また經驗することの出來ないやうな、——に這入ることが出來ると思つた。

彼の女には夫の心の裡に起つてゐる事が、よく理解することは出來なかつたが、それでも彼が、蠟燭の炎のやうに穩やかで、且つ頼もしい人であると言ふことは認めてゐた。そして彼の女は、彼の眼の中にある特

殊な輝きのあることに氣付いた。彼の女は彼の力を信じてゐた。

パーテル・ワツシリーは屢々何處へ行つて、何のやうな生活をしようかと妻に相談した。然し彼の妻は其麼ことを聞くのを欲してゐなかつた。精密な確りした言葉は、彼等に遠い微かな夢を與へると言ふよりも、むしろ苦痛に充ちた過去が、再び未來となつて彼等にやつて來るかのやうに見えた。

彼等のたゞ一つの願ひは、彼等が現在經驗しつゝある恐ろしい世界の境界を越えて、遙か遠い彼方の國へ行きたいと言ふことであつた。

彼の女は屢々飲酒癖の發作に襲はれたが、直ぐに止んで了つた。彼の女はその發作の襲來を恐れてゐなかつた。それは彼の女が自分で、直ぐに止めることが出來ると言ふ自信を持つてゐたからだつた。

「彼方へ行つたら凡てがよくなるだらう。そして酒杯なぐさも飲まなくともよ



くなるだらう」

彼の女はぼんやりした美はしい夢のやうな光の中に浸りながら、此處ことを考へてゐた。

夏になると彼の女はまた終日森や野原へ行つて、黄昏頃に歸つて來た。そして門の外に立つて、バーテル・ワツシリーが草刈から歸るのを待つてゐた。足早い夏の日はもう暮れかゝつて、夜闇は音もなく靜かに押し寄せて來た。然し彼の女には、恰も夜と言ふものが無く、日が暮れると言ふことも無いかのやうに思はれたのであつた。

彼の女は、浪に漂うてゐるやうな、臃げな輪郭をした自分の膝の上に載せた手を見て、始めて自分と手との間に何物か介在してゐることに氣付いた。

それは靈魂のやうな、秘密に充ちた暗黒の夜であつた。

丈高いがつしりしたバーテル・ワツシリーが悦しさうにして、青草や野原の鋭い好い薫りに圍繞されながら歸つて來た時、彼の女はもう不安な感じに襲はれてゐた。

彼の顔は夜闇のために判然してゐないが、眼ばかり生々とした輝きを現はしてゐた。そして彼の控へめな言葉の裡に、果てしない荒野の廣さと、草の薫りとそして長時間の勞働の愉快さが罩もつてゐた。

「地上は好い氣持ちだね」

彼は喘息ながら笑つた。然しそれは他を嘲けり、また自分自身をも嘲ける謎のやうな、陰鬱な笑ひであつた。

「さうですとも、ワスヤ、勿論好いにきまつてるわ」

牧師の妻は確りした調子で言つた。

やがて二人は夕餐の膳に向つた。



パーテル・ワツシリーは廣い荒野から、狭くらしい自分の部屋へ歸つて來て、大きな手足を持って餘しながら、所在なさうにして動かしてゐた。妻は面白がつて彼を揶揄ひ始めた。

「誰か今お前に説教を書かせて見るといゝわ。お前きつと筆なんか持てやしないから」

彼の女は言つた。

そして二人して笑ひこけた。

パーテル・ワツシリーは一人である時何時もその顔が莊重で眞面目になるのであつた。彼は戯談も言はず笑ひもせず、たゞ一人靜かに瞑想に沈んだ。彼の眼は陰慘で高慢らしい期待に充溢してゐた。

彼は斯うした平和な希望に輝く日にも、猶且つ慘虐な謎のやうな運命の魔が、彼の生命を抑壓してゐるかのやうに思つた。

七月二十五日の黄昏、パーテル・ワツシリーは一人の勞働者と共に禾束を曳いて來た。

近くの森から斜めに長く／＼引いた陰影が、全野に棚引き渡つた。

ツナーメンスコエ村からは、時ならぬ微かな殆んど聞えないやうな鐘の響きが聞えて來た。

パーテル・ワツシリーは周章かねてて振り返つて見た。彼の家の屋根が、少し黒く突き出てゐる銀のやうな野原の中に、眞黒な蒸發氣の棒のやうに動かすに立つてゐた。そしてその棒の下には輝きの無い眞紅の炎が、今にも立ち昇らうとして渦巻いてゐた。

彼が禾束を投げ出して、村に駆けつけた時は、もう夜闇が迫つて來て、炎も殆んど消えてゐた。黒い炭のやうな棒が燃え切つて、裸立ちになつたストーブの白煉瓦が、微かに閃めてゐた。



鈍色の空氣が、水蒸氣のやうに濃く地上に横たはつて、荷を卸ろす農夫の脚を包んだ。そしてその足は、燃差ちんさしの消え落ちてゐる地上に、空間より垂れ下つた陰影のやうに見えた。

全村は混雜を極めて、農夫等は溢れた水のために出來た新らしい水溜りを涉わたりながら、聲高に罵り合ふやうに話してゐた。

今までに見知つてゐる顔や聞き慣れた聲が、急に新らしいものになつたかのやうに、お互に珍らしげに見合つてゐた。

人々は野邊から家畜を追つて歸つて來たが、家畜は不安と恐怖とのために、彼方此方に驅け散じ、牛は恐ろしい聲で吼え、羊は其處に立ち凍こんだまゝ、硝子のやうに澄んだ眼で、凝乎とそれを見詰めてゐた。

彼等は途方とほうに暮れたやうに、お互の脚の間をくゞり抜けたり押し合つたりしてゐたが、また譯も無い恐怖に襲はれたやうに、蹄で砂煙を立て

ながら、一方に馳せ集つて一群を作つた。

村の女達は叫びながらその後から走つて來た。そしてその單調な呼び聲が全村に響き渡つた。

「やあ……やあ……」

赤銅のやうな顔の所有者の黒い姿、單調な異様な叫び聲、憂苦と言ふ原始的な感情、それ等が、ごつちやに綜錯して、或る原始的な野氣を人間と動物との間に充溢せしめてゐた。

それは風の無い日であつた。

焼け落ちたのは、たゞ牧師の家のみであつた。火事は多分、酒に酔つて寐てゐた牧師の妻の部屋から起つたらしかつた。

火の附いてゐる巻煙草か、不注意に投げ出した燐寸が、原因だらうと言ふ噂もあつた。家の人達は皆野邊へ出てゐたので、村の人々がそれに氣



付くまでには可成りな時間が経つたのであつた。

怯え切つた白痴兒と、二三の家具を取り出したばかりで、牧師の妻はひどい火傷を負うた。彼の女は僅かに呼吸を保つてゐるだけで、知覺は殆んど失つてゐた。

人々は此の事を、馳せ來る牧師に報したら、如何に嘆き悲しむであらうと思つてゐたのに、豫想にすつかり相違したので、皆吃驚した。牧師はたゞ頭を前方へ突き出し、唇に力を入れて確りと引緊め、莊重な態度で注意して聞いてゐた。彼は恰もさうした事實の到來することを豫測してゐて、たゞその事實の相違無いことを確めようとしてゐるかの如く見えた。彼は風に髪を吹かれながら、動搖する車の上に立つて、火の柱を見詰めたまゝ、狂氣のやうに激昂して、一さんに駈けつけて來た僅かの中に、凡てを推測したかのやうに見えた。——何故に此の災厄に逢ひ、何故に妻

と共に全財産が灰燼に歸さねばならなかつたか、また何故に白痴兒とナストアは生き残らねばならなかつたかを——。

一瞬の間彼は沈黙に沈んだまゝ、眼を地上に落してゐたが、突然にまた頭を上げて、群衆を押し分けながら、驀地に副牧師の家へ歩いて行つた。死にかゝつてゐる妻は、其處で介抱されてゐた。

「何處に居ます？」

牧師は沈黙してゐる人々に問うた。人々はたゞ黙して指さした。

彼は指ざされた方へ近寄り、もう人の形を失つて、微かに呼吸してゐる一塊の肉の方へ、低く身を屈めて見た。愛らしい髻は消え失せて、たゞ白い火腫のみが彼の眼に這入つた。彼はぎよつとして思はず後退りした。そして彼は両手で顔を被うた。

牧師の妻は身體を動かし始めた。正氣づいたのであらう。そして何か



言ひたさうに口を動かしてゐたが、言葉は出なかつた。たゞ短かい微かな陰惨な聲が、喉から押し出て來るのみであつた

バーテル・ワツシリーは顔から手を放したが、その顔には寸毫も悲しみの影はなかつた。豫言者の顔のやうに莊重でひつつつてゐた。彼は豊にでも物を言ふやうに、聲高に一節々々に力を入れて話し出した。その聲の裡には、恐ろしい信仰の響きがあつた。それは彼の力から震へて出る人間的のものではなく、たゞ言語に依つて表現することの出來ない見神を實感し得る者のみが、言ふ處の言葉であつた。

「神様の御名に依つて……お前聞えるかえ？」

彼は叫んだ。

「私は此處にある。ナストヤ、私はお前の傍にある。そして子供も此處にある。そこのがワツシリーでこゝのがナストヤだ」

牧師の妻は動かなかつた。たゞ恐ろしい顔をしてゐるので、彼の言葉が聞えたのか何うか、誰にも解らなかつた。

バーテル・ワツシリーは形の壞れた焼け爛れた内塊に身を向けて、猶聲高に語り續けた。

「許して呉れナストヤ、罪の無いお前を私が滅したのだ。許して呉れ私の唯一人の可愛い奴。そしてお前は子供達を心から祝福してやつて呉れ。さあ此處にある。これがナストヤでこれがワツシリーだ。祝福してやつて呉れ。そして平和に天國へ歸つて呉れ。死を恐れては不可ません。神様はお前をお許しなすつたのだ。神様はお前を愛してゐなさる。そして休息を與へなさるのだ。平和に天國へ行きなさい。天國で再びワスヤに逢へるだらう。平和に歸つて行きなさい」

後の方へ引退つてゐた人々は、悲嘆に沈みながら、眠つてゐる白痴兒



を抱いて其の場を去つた。

パーテル・ワツシリーは夜の來たことを妻に知らずまいとした。そしてその夏の短か夜をたゞ一人、死にかゝつた妻の傍に留つた。彼は膝まづき、頭を妻の傍へ突き出し、幾分淡くはなつたが、その不快な焼け肉の臭氣を嗅ぎながら泣き初めた。堪へ難い同情の涙が靜かに流れた。彼は堅く彼を信じて、悅樂と愛とを期待した若い美しい妻のために泣いた。愛する子供を失つた憐れな妻のために泣いた。常に恐ろしい妄想につき纏はれ、幽靈に追驅けられて、物狂はしく悶え通して來た妻のために泣いた。そして夏の夕べ柔和しく優しく、彼の歸りを待つてゐたいとしい妻のために泣いた。

これが彼の女の身體だ。尊い優しい身體だ。火のために焼き盡されて、惡臭を放つてゐる。妻は何うしてあつたらう？ 叫び悶えて夫の名を呼

んだであらうか？

パーテル・ワツシリーは涙に潤んだ眼であたりを見廻しながら立ち上つた。

何と言ふ靜寂さであらう！

それはたゞ臨終の時にのみあり得る靜寂さだ。

彼は妻を見やつた。彼の女は臥したまゝ身動きもしない。たゞ死人のみに見らるる不動の容姿だ。着物の被布の皺は恰かも石に刻みこまれたものゝやうに見え、生命の鮮やかな色彩は布地から脱出して、蒼白い美術的な色が現はれてゐるやうに見えた。

牧師の妻は死んだ。

開け放しになつてゐる窓口には、温かい柔かな夜闇が呼吸してゐた。

何處か彼方で、小鳥が此の部屋に寂寥さを、より一層深めやうとして



るかの様に鳴いてゐた。そして蟋蟀がそれに調子を合せて鳴いてゐた。洋燈の周囲には、小さい蛾の群が、音も立てずに飛んで来て、洋燈に突き當つて落ちたが、それは更に病的な斜めな運動を始めて、光を慕つて押し寄せて来た。

それ等が忽然と暗闇の裡に隠れるかと思うと、今度は吹雪の雪片のやうに白く閃いて現はれて来る。

牧師の妻は死んだ。

「いや〜〜」

牧師は聲高に叫んだ。そして彼は自分で驚いた。

「いや〜〜 私には信ずる。お前は正しい。私は信ずる」

彼は跪いた。そして綿や繙帶等の散ばつてゐる床に頭をすりつけた。

彼は丁度塵埃となつて、塵埃の仲間に入らうとするかのやうに見え

た。彼は非常な歡喜にうたれたやうな、限り無い謙讓な態度で、「私」と言ふ言葉を取り除いて言つた。

「信ずる！」

彼は更に沈黙して専心に祈つた。彼は火と死との裡に、言ふ可らざる見神の感にうたれて、遂に全く朽ち果つべき肉體の祈りを神に捧げた。

彼は自分の生命の感覺をも失つてゐた。丁度身體と靈魂との永劫なる關係が斷ち切れたかのやうに、そしてまた靈魂が凡らゆる地上のものから放れ、自分自身からも放れて、識られざる秘密に充滿した、高い彼方へ昇り行くかのやうであつた。

惑溺や懷疑的思想の煩悶や、反抗的人間の驕慢から起る激しい憤懣や大膽な叫び聲などは、凡て壊れ落ちた肉體と共に、塵埃の裡へ沈んでいつた。そしてたゞ靈魂のみが彼の自我的な桎梏を斷つて、不可思議な恵み



の生活の裡へ這入つて行つた。

パーテル・ワツシリーが身を起した時、あたり周囲はもう明るくなつてゐた。日光は長く赤く、死人の着物の上に落ちて、光る斑點を現はしてゐた。彼はそれを見て驚いた。彼が記憶に残つてゐる最後のものは、暗闇とそして灯のあたり周囲を飛び廻つてゐた蛾とばかりであつた。

焼死んだ蛾は、まだ微かに燃えて、黄色な焰のちら／＼してゐる洋燈の傍に、黒い束をなしてその残骸を留めてゐた。一つの大きな頭をした垂毛ビのある灰色の蛾は、まだ生きてゐたけれども、飛び去るだけの力は無かつた。傷ついてゐるのか、それは覺束なげに卓の上を匍匐はらばつてゐた。それは夜と暗闇とを探し求めてゐるのだが、強い太陽の光線は四方から流れ込んで、暗闇の裡に生れた小さい不具の動物の上に燃え立つてゐた。その小さい不具者は絶望したやうに、焦げた可哀い翼を擴げて羽はばたき

した。けれども彼れには飛び去るだけの力が恵まれてゐなかつた。彼は曲線を描きながら倒れたり匍匐はらばつたりして、暗闇を探してゐた。

パーテル・ワツシリーは洋燈を消して、震へてゐる蛾を戶外へ投げ捨てた。そして甦生よみがへつたやうな新鮮な氣分と、非常な安心とを持つて、副牧師の庭園へ出て行つた。

彼は眞直な細い道を辿たどつた。手を背後うしろにまはして組み、頭を櫻や林檎の樹の低く垂れた枝に觸さはられながら、考へ込んでぶら／＼歩いてゐた。日の光は樹の間を通して、彼の頭上を照してゐた。彼が不圖振り向いた時、光線は火の流動のやうに、低く彼の瞳に流れ込んで來て、彼を瞬かせた。虫に喰はれた林檎は、微かな音を立て、地上に落ちた。そして櫻の樹の下の乾燥し切つた地上には、牡雞がこゝと鳴きながら、黄色の毛立つた雞と土を引つ搔いてゐた。



然し牧師には太陽も落下した林檎も目に映つらなかつた。而も彼の頭脳は不思議なほど透澄であつた。——丁度澄み切つた朝の空氣のやうに明瞭に——。

斯うした氣分は、陰慘な重苦しい懊惱に訶なまれ續けて來て、恐ろしくぼんやりしてゐた彼の頭脳には、未だ嘗つて浮ばなかつた。彼は彼處で混濁と無稽とを見、そして此處には權威ある偉大な手が、彼に眞實の道を啓示してゐるやうに思はれた。

彼は煩悶の靈光に依つて、家屋と家族とそして人生の空虚なる經營より解放され、權威ある手に依つて、大いなる行爲と大いなる犠牲とに導かれたのであつた。

神は彼の生命を荒野のその如くにした。然し彼は欺瞞と曲折とに依つて、古くより踏み荒らされて來た軌道を、人類の多くが踏み迷つたやう

ではなく、果てしない廣漠とした荒野の中に、新らしく躍進すべき道を、探究しようとしてゐるのであつた。

昨日の血氣と火の柱とは、神が曠野に於てユダヤ人に道を啓示したものでないだらうか？ 彼は想ひに沈んだ。

「おゝわが神よ！ わが弱き力にて達し得らるゝだらうか？」

然し新らしい太陽のやうに、彼の靈魂を照した焰は彼に答へた。

「彼は選ばれたのだ！」

一つの識られざる事業と犠牲とのために、彼は選ばれたのである。

彼は神を瀆し、熱狂的態度で自分の運命を愁訴したパーテル・ワツシリ—その人であつた。彼は選ばれた人である。

假令大地は彼の脚下に口を開き、地獄は赤い狡猾な眼で彼を凝視しても、それは何等彼の意とする處ではなかつた。



彼は選ばれた人である。而も彼自身の踏む大地は確りしたものである。パーテル・ワツシリーは立ち止つて、とんと大地を踏み付けた。

驚かされた牝雞は、不安さうに耳を立てながら、こゝと鳴いて雛を呼び集めた。

一羽の雛は遠くへ離れてゐた。母雞の呼び聲に周章て、走つて來たが、途中で大きな二つの熱した骨張つた手に捉へられて了つた。

パーテル・ワツシリーは笑ひながら、黄色い雛に熱い濕つばい息を吹きかけた。彼は巢のやうに手を組み合せ、そして注意深く胸に抱き寄せた。彼は斯うして長い眞直な道をまた辿りはじめた。

——自分に何んな事業があるのかそれは知らない。然しそれを知る必要があるだらうか？ 自分は自分の運命を理解したつもりで、それを慘虐な生涯だと言つた。けれども自分の智識は虚偽であつた。自分は一人

の息子を要求した。そして異様な妖物のやうな形をした、理性の無い者が生れて來た。自分は財産を造つて、自分の家を立ち去らうとした。然し財産と家とは災厄にかゝつて失せてしまつた。斯うしたことが自分の智識である。そして彼の女——限り無く不幸だつた妻は、母として子宮すらも侮辱され、涙も泣き乾き、凡らゆる恐怖を味ひ盡したではないか？

彼の女は此の地上に新生涯の來るだらうことを豫期した。而もその生命は、まつたく苦痛に充ちたものであつた。今はもう死人として彼處に横はつてゐるのだ。靈魂は笑ひながら、彼の女の智識を虚偽だと云つてゐるだらう。神は凡てを知つてゐる。神は我に多くの恵みを與へた。彼は我が苦惱の鋒先を以て、他人の憂苦を衝かしめんがために、眞の人生の姿を見せ、且つ苦痛を味はせたのだ。彼等は自分を待つてゐる。彼等を愛せず居られやうか？



愛する同胞よ！ 神は、我等を恵みなされたのだ。恵みの時は来たのだ！

彼は雛の柔かい羽毛を接吻しながら歩を運んだ。

——わが進むべき道、權威ある手より放たれた矢は、ある道を啓示するのだ。矢は颯と鳴つて的を射貫し、それは射手の意志に従ふのだ。それは見る可く我に與へられたのだ。愛す可く我に與へられたのだ。そして此の見解と愛とより來るものは、即ち神の御心である。——わが事業、わが犠牲である。——

雛は暖かな手に快よく抱かれて、可愛い小さい眼を閉ちて眠り込んで了つた。牧師は思はず微笑した。

——さうだ！ 若し私が手で壓迫したら、雛は死んで了ふのだ。雛は私の手私の胸を信頼して、安らかに寝込んでゐるのだ。そしてその私自身

がまた神の御手の中にあるのではないか？ 此の雛が人間の善意と人間の愛情とを信じてゐるなら、私もまた神の慈愛を信じ得るのではあるまいか？

彼は笑ひながら黒く朽ちかけた齒を現はした。彼の莊重な犯し難い顔には、日の光りが深い藍色の水の上にきらめくやうに、數千の皺を寄せて微笑が漂ひ出た。そして人間界の歡喜は重苦しい想ひを壓倒し、長い間たい歡喜と悅樂と日光と眠れる雛とがあるのみであつた。

然し彼の顔の皺は元のやうに伸び、嚴肅とそして莊重さを現はし、眼は豫言者のそののやうに輝いてゐた。彼の前には偉大なある高いものが現出れて來た。之こそ奇蹟と言はるべきものであらう。彼處は常に、人間的な餘りに人間的な思想を以てしては、到底窺うことの出來ないものである。彼處には思想の限界がある。そして無限の蒼空が、永劫なる一の新



世界を啓示してゐる。それは已に下界ではない。愛の世界、神の正義の世界、苦痛も飢餓も疾病も無く、輝やかしい、憂悶のない顔をしたもの達の住む世界である。

大きな恐ろしいほど美はしい金剛石のやうに、その世界は無限の蒼空に輝いてゐるのだ。そして人間の眼は、それを苦痛と恐怖とを感せずして見ることは出来ないのだ。

パーテル・ワツシリーは謙讓に頭を下げて私語さごやいた。

『み意志こころのまゝになし給へ！』

庭に人が現はれて來た。それは副牧師と彼の妻とその他の人々とであつた。

彼等は遠くより此の高僧を認めて、懐しげに點頭うなづきながら急いで近寄つて來た。

彼に近づくとき彼等は步調を弛ゆるめたが、吃驚したかのやうに立ち止つた。それは恰かも人が、火事や洪水や狂人の靜かな謎のやうな眼眸の前に立ち止つた時のやうであつた。

『なせ其麼に私を見るのか？』

パーテル・ワツシリーは驚いたやうに問うた。けれども彼等は身動きもせず牧師を見詰めてゐた。彼等の前には一つの偉大な全く見知らざる新らしい人間が立つてゐるのである。何か非常に沈靜しんじやう切つたものが、此の人を彼等から隔てゝゐる。否彼の非常な沈靜さが、彼自身を彼等から隔てゝゐるのだ。

彼は別世界から來た陰影のやうに、彼等に暗い恐怖の念を惹き起させた。

彼の顔には、太陽がどんよりした深い水にきらめく時のやうに、輝や



かしい微笑みが溢れてゐた。そして彼はその無骨な大きな手に、丸い柔かい黄色な雛を抱いてゐた。

「なせ其處に私を見るんだね？」

彼は笑ひながら繰り返した。

「私が怪物に見えるのかね？」

(九)

バーテル・ワツシリーは誰の眼でも理解出来るほど、生涯につながつて来た過去、とそして空しい懊惱とを、急に放捨した。

彼は市に住んでゐる姉へ手紙を出して、俄かにナストヤをその許へ送ることにした。

彼は一日も躊躇することをせず、娘を送つた。親心に曳かされて、色んな面倒な事が起りはすまひかと、それを懸念けんねんしたのであつた。ナストヤは別に嬉しがりも悲しがりもしなかつた。彼の女は母が死んだので、安心したが、白痴兒も一緒に焼死しなかつたことを、残念に思つてゐた。彼の女は間もなく、車の上に坐つた。

彼の女は母の物を縫ひ直した時代後れの着物を纏うて、子供の帽子を斜に冠つてゐた。その容姿は、十六七の娘盛りと言ふよりも、むしろ異様に着飾つた若い醜い女であつた。そしてあちこちと忙しさうに見廻してゐる例の狼のやうな眼で見やりながら、父親そつくりの嗔聲で言つた。「いゝえ、何うぞおかまひなく、副牧師さん、私いゝ工合に坐つてゐますの。これなら無事に着きませうから。さよならお父さん」  
「さよならナストヤ。好く勉強するんだよ。怠けないやうにしてね」



車が俄かに動き出したので、娘の身体は一寸跳ね上げられたが、直ぐ棒のやうに真直に坐つて、もう少しも身動きをしなかつた。

たゞ車の輪が深く大地に喰込んだ時に、とん／＼と身体を持ち上げられたばかりであつた。副牧師ははんかちを振つて別れの挨拶をしたが、ナストヤは見返りもしなかつた。副牧師は不愉快さうに頭を振つて、はんかちを隠囊へしまひ込んだ。

ナストヤは再び此のツナーメンスコエ村へは歸らうと思つてゐなかつた。

「息子さんも一緒に送りなされればよかつたのに、ワツシリーさん。あの料理女一人とでは一寸骨ですぞ。馬鹿な女ではあるし、それに襲と來てるんですからね……」

副牧師は消え行く車の砂煙が、もう納つてから斯う言つた。

パーテル・ワツシリーは想ひに耽りながら彼を見返つた。

「何うして自分の罪を他人に負はされませう？ 副牧師、皆な私の罪だ。どこまでも私が負はねばならない筈だ。私達は老人や子供でも扶けて行くとしよう。ねえ副牧師？」

彼は快活さうに笑つた。そしてたゞ彼のみが知つてゐる或るものを、罪無げに嘲笑つて、副牧師の肩をとんと叩くのであつた。

パーテル・ワツシリーは自分の所有地をすつかり村の小作人に委せてしまつて、たゞ少しばかりの金を、寡夫扶助料として借主から取ることにした。

「多分これすら受け取れませう」

秘密らしい調子で言つた。

牧師は猶他の事をもした。



彼はイワン・ポルフイリツチに、飢餓に苦しめられてゐるモスヤギンを備はせた。

最初モスヤギンは、彼の處へ願ひに来て、追ひ歸されたのであつた。

イワン・ポルフイリツチは牧師と相談の結果、此の百姓を備ひ入れたばかりでなく、家屋再建の材料をも送つてやることにした。彼は何時も黙つてゐた。そして時たま娘<sup>はら</sup>んでゐる妻に言ふのであつた。

「私の言ふことを覚えて置きなさい。彼はまた何かやり出すよ。あの牧師はね」

「何んなことを？」

妻は無頓着に斯う聞いた。

「さあ、何んなことかね。私の關係した事ぢやないから黙つてゐるが、若しさうでなけりや……」

彼は茫然と窓から、政廳へ通ずる街路を眺めてゐた。

長老の謎のやうな言葉が原因してか、或はまた他の處から起つたのか、人々はその出處を知らなかつたが、ツナーメンスコエの高僧に關して、色んな穩やかならぬ噂さが、村内のみか近隣の村までも廣まつて行つた。

遠方の山火事の煤けた靄のやうに、臭ひはそろ／＼やつて來たが、誰もその來たのに氣づかなかつた。そして人々はお互に顔を見合せて、暗くなつた太陽を見た時始めて、何か斯う新らしい穩やかならぬ大事件が、近づきつゝあると言ふことを悟<sup>さと</sup>つたのであつた。

十月の半頃、新築の家は、あらかた出來上つた。然し完全に屋根を葺き、壁を塗りたてた處は半分位で、その他は桁も垂木<sup>たきぎ</sup>も無く、窓には戸も附けてなかつた。その様子は丁度人間の傍に、骸骨を並べたやうな姿であつ



た。夜闇が襲つて來ると、何か斯う薄氣味悪いやうな、悚然とするやうな氣持がした。

バーテル・ワツシリーは一も新らしい家具を買はなかつた。

塗つてない板壁の内側には、樹指が琥珀のやうに輝いて流れ出たまゝ、まだ固まつてゐなかつた。四つの部屋の中には、腰掛が二つ、卓が一つと、そして寢臺が一つあるのみであつた。眼の悪い聾の老婢が、ストーブを燃して呉れたが、部屋はなかく温まらなかつた。部屋の中には何時も濕氣の匂が漂つてゐて、それが蒼い靄のやうに汚ない。そして踏み廻られた床の上をうねつてゐる蒸氣のために、よく頭痛がするのであつた。寒い霜のひどい朝などは、窓硝子の内側に、雪の輪の白い層が出來てゐた。

家の中はほの暗かつた。

冬になると、窓の隅に氷が張つて、冷たい水の滴がぼた／＼床の上に落ちた。

慣れない百姓達が、何か用事があつて牧師の家へ來ると、當惑してしまつて、斯うも酷い處に牧師が住んでゐるのかと思うと、自今の罪でもあるかのやうに思はれて、眼をそらすのが常であつた。

副牧師は「荒屋の恨み」だと言つてゐた。

バーテル・ワツシリーは始めて此の新築の家に引越して來た時、しばし満足氣にがらんとした物置同様の冷たい部屋を歩き廻つて、機嫌よく白痴兒に斯う言つたのであつた。

「これはどうも素的なものだな、ワツシリー」

白痴兒は獸のやうに長い舌を出して、唇を甜めながら、雀躍するやうな調子で、木兔のやうに聲高に言つた。



「ふう〜」

彼は悦ばしげに笑つた。

然し次の瞬間には、荒廢した家屋の惡寒と寂寥とを、感じない譯にはいかなかつた。

白痴兒は怒り出して、自分の棒ステックを打ちながら、床の中へもぐり込まうとしたが、ばたりと打倒れて痛いめに逢つた。

彼は時折ひどく感覺が麻痺したやうな状態に陥つて、惡夢にでも壓されてるやうに、陰鬱になるのであつた。纖細な長い指で頭を支へながら、舌先を少し出して、小さい獸のやうな眼で、横目に物を見るのであつた。そして或る時は白痴でも何でも無いやうにも見えた。

彼はまた、たゞ自分自身にのみ關係した或る事、他の人間には見ることの出来ないやうな異様なことを、想かんがへてゐるやうにも見えた。そして誰

も理解することの出来ない、特殊な單純な謎を織つてゐるかのやうにも見えた。彼の膨らんだ小鼻を持つた平べたい鼻、獸のやうに眞直ぐに背に續いてゐる短かい頂骨を見たものは、誰しも、若しこれに確しつりした足が附いてゐたら、彼はきつと森林へ這入り込んで、秘密な森林生活を始めるだらうと思つた。——陰蕩的な癡猛な、そして憂鬱な、森林的哲學に富んだ生活を始めるだらうと思つた。

パーテル・ワツシリーは何時も白痴兒と二人して一緒に坐つてゐたが、白痴兒の意地悪い邊あたりかまはぬ叫び聲のために聾のやうにされ、また凝乎と見据ゑてゐる謎のやうな眼に付き纏はれて、遂彼と同じ秘密の生活に這入つたのであつた。

彼は偉大なる事業と、未知の大きな犠牲とのために聖玲な身體にならうことを努めた。そして彼の生活は、晝も夜もたゞ一の祈禱となり、たゞ



一つの沈黙の流動の中へ這入つて行つた。妻に死に別れてから後、彼は  
厳しい断食をやつた。

彼は肉や魚は勿論のこと、茶すら飲まなかつた。そして水曜と金曜の断  
食日には、たゞ水に溶かした麵麩だけを食へた。

彼は譯も無いほど嚴重に、恰かも仇打でもやるかのやうに、此の嚴し  
い断食を、白痴兒にもやらせたのであつた。

白痴兒は飢ゑて、獸のやうに苦しみ叫んだ。彼は其處ら邊を引掻いて、  
犬の涙のやうに出ない涙を出して泣いた。然し一片の麵麩すら餘計には  
與へられなかつた。

牧師が人に面會するのは極く稀で、たゞ必要な時のみに限られてゐた。  
彼は出来るだけ交際の時間を短縮した。そしてその餘の時間は、僅かの  
休息と睡眠とに費やす外、始終膝まづいて、専心にお祈りを捧げてゐた。

彼は立ち上ると直ぐに四福音書と使徒行傳と、そして豫言者の書とを食  
るやうに讀み耽つた。

祭日だけは規則通りのお祈りをしたが、平常はたゞ朝のお祈りだけを  
仕續けてゐた。

高齢の副牧師は、彼と共に勤めすることは出来なかつた。それで、  
數年前飲酒癖のために副牧師の地位を失つた、詩篇朗讀者の汚ない獨身  
の老人が、彼を扶けてお勤めすることになつた。

パーテル・ワツシリーが朝寒さに震へながら教會へ行つた時、教會はま  
だ暗かつた。道はさほど遠くはなかつたけれども、馬鹿に時間がかつた。  
それはよくあるやうに、夜の中に雪の小山が出来て、足が深く埋ま  
つたり、或は處々乾いて輝やいてゐる雪塊に滑つたりするからであつた。  
それで一足歩むことは、まるで十歩も歩くやうな思ひがしたのであつた。



教會は通例としてストーブを焚かないことにしてあるので、氷のやうな鋭い冷気が、堂内に充溢してゐるのであつた。それは人氣無い建物の裡のみに感じられる、一種ぞく／＼するやうな寒さであつた。

吐息は白い霧のやうに見えた。そして金屬類に手を觸れると、鋭い痛みをすら感ずるほどであつた。

詩篇朗讀者であり且つ教會の番をしてゐる老人は、牧師のために特に火を焚いた。バーテル・ワツシリーはストーブの前に蹲踞つて、手を温めた。斯うでもしなければ、指が凍じて硬ばつてしまつて、十字架が持てなくなるからだつた。此の十分の間は、牧師は老人を合手に、寒さのことや、所謂「豫言者の汗」など言ふことや、色んな戯談などを言つてゐた。詩篇朗讀者は不愉快だつたが、それでも我慢して聞いてゐた。

飲酒癖と寒氣とのために、詩篇朗讀者の鼻は赤く――幾分蒼味を帯び

て――なつてゐた。むく／＼と毛の生えた顎は、役を廢めてから時折剃つたが、それは丁度物でも嚙んでゐるかのやうにもぐ／＼動いてゐた。

牧師は黒の法衣を着けた。

金の縫取りは擦り耗した皺となつてゐた。彼は一掴まみの香を香爐に焚き、人の見分けもつかないやうなほの暗い裡で、盲人が慣れた場所で仕事でもするかやうに、禮拜を始めた。祭壇へ供へられた二本の蠟燭――一つは詩篇朗讀者の前に、一は聖地圖の前に――は却つて暗闇を濃くしてゐた。その蠟燭は靜かに搖れて、焦き立つことをしない二人の動作に、調子を合せてゐるやうに見えた。

彼等は長いこと禮拜した。靜かにそして専心に祈禱した。口より出る言葉は震へ、空虚な教會の中に漂つて冷たく反響した。そして世界にはたい反響と暗闇と神に禮拜する二人とがあるのみであつた。老いた詩篇



朗讀者の胸琴にも、漸次と何か知ら感應が起つて來るのだつた。彼は耳を牧師の方へ向けて、その一言一句に注意し始めた。もぐく動いてゐた顎は、急に焦しくなり始めた。そして孤獨な汚ない老人は、何處へか消え失せた。敗殘の悲愁に充ちた彼の全生涯は消え失せたのだ。そして今や新らしい歡喜の涙が溢れ出た。折々壇上より叫ぶ詩篇朗讀者の聲に、答へるものは無かつた。しばし莊重な沈黙が周囲を支配する。そして蠟燭の黄色な尖つた舌先が、動かずに輝いてゐる。遠くから涙と喜悅とに咽んだ聲が響いて來る。その暗闇の中に、再び二つの姿が、一步々確りした歩調で、悠然と動き出す。炎は音律を刻みながら、靜かに調子を合せて搖ぐ。――

禮拜の濟んだ頃、夜はもう明け放れてゐた。

「御覽なさい、ニコル。私達は此處に温くなつた」

バーテル・ワッツ・シリは言つた。

彼の口からは白い霧が涌き出てゐた。そしてニコルの頬の皺は薔薇色になつてゐた。彼は嚴かに試験でもするかのやうに、牧師を見ながら懸念らしく問ひかけた。

「そして何うするのでせう……明日私達は？ 明朝もまたやはり斯うしますか？」

「勿論ともさ、ニコル。勿論だよ」

ニコルは牧師を丁寧な戸口まで送り出して、番僧室へ歸つて來た。一ダースばかりの小さいのや大きいのをこた混せにした犬が、彼に吠えたり飛びついたりした。彼はまるで子供のやうに犬に取り圍まれながら、餌をやつたり撫でてやつたりした。然し彼はそうしながらも、牧師のことを考へてゐた。



彼は牧師のことを考へながら、歎息したり讚美したりした。そしてまた彼は、口を開かずに笑つたが、それを犬に見られまいとして、直ぐに背を向けた。彼は斯うして夜の明けるまで考へ續けてゐた。

翌朝彼は何時になく早く起き上つた。それは牧師が嘘言を吐きやすまいか、寒氣と暗闇とに怖けやすまいか、と斯う考へたからであつた。

然し牧師は來た。震へてはゐたが彼の顔は喜悅に輝いてゐた。そして再びストーブの口から、暗い教會の奥の方まで、血のやうに紅い線が曳かれた。やがてその上に黒い溶けるやうな影が現はれて來た。

始め牧師の異様なお勤めの話しを聞いたものが、澤山やつて來たが、彼等は牧師を見て皆驚いた。或る者は牧師を發狂したのだと言ひ、或る者はひどく感動して泣いた。そしてまた或る者は、心に鋭どい抑へ難い不安を感じたのであつた。

それは牧師の眞直に開いた輝く眼の中に、深く秘められた不可解の威壓と、執拗な宿命的秘密の閃めきとを、見出したからであつた。

然し間もなくものすき連は、教會へは來なくなつた。そして暗い早朝の教會には、二人のお祈りを妨ぐる者は居なくなつた。

けれども今度は、教會の暗闇の中から、牧師の叫び聲に應じて、忌まはしい息の塞るやうな溜息が、響いて來るやうになつた。

こゝでは石の床に跪き、そこでは唇で私語き、かしこでは新らしい小さい蠟燭を、手に差し出すのであつた。そしてその小さい蠟燭は、照らされた森林の中にある、若い撓み易い樺の樹のやうに、此の二人の沈黙したものゝ間に立つてゐた。

不安な陰鬱な無根の噂は、漸次と形が出來かゝつて來た。そしてそれは人間の住む凡らゆる隅々まで這ひ廻つて、その後には憂悶か希望か期



待かの何れかを残して行つた。

人々はあまりに饒舌で曖昧であつた。彼等は頭をふつて愁息を漏らした。

ツナーメンスコエ村から百哩ばかり離れた或る縣では、單純な沈黙を守つてゐた人々が、「新らしい宗教」を語らうとして、唐突に立ち上つたが、直ぐにまた沈黙した。此の噂は風や雲のやうに、また遠い山火事の煤けた煙のやうに、更に遠い彼方まで擴がつて行つた。

風評が市に這入つて來たのは、可成りに後のことであつた。

石の壁を越えて、人間の密集してゐる熱鬧の巷へ侵入して來るのは、困難なことでもあり、また苦痛なことでもあつたのだらう。それが市中へ來た時は、まるで盜人のやうに裸にされ、引撈ひきかられてゐたのだつた。

それは或る人が自分自身で焼死して、そして新らしい迷信的宗教が起

つたと言ふことである。ツナーメンスコエ村へ官服を着けた人がやつて來たが、何にも見つからなかつた。立ち並んだ家や、表情の無い顔は何にも語つて聞かせはしなかつた。

彼等は直ぐにまた引返した。

けれども風評は、此の事があつてから更に一層激しくなつた。

パーテル。ワツシリーは何事も無く毎朝禮拜を怠らなかつた。

(十)

長い冬の夜をパーテル・ワツシリーは白痴兒と共に暮した。

松板の壁と桁の天井の下の、白い鳥籠のやうな板圍いたがこひの中に、彼は閉ぢ罩もつて暮した。